

【翻 訳】

イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(1)

亀谷 学・大塚 修・松本 隆志 訳注

本稿は西暦9世紀(ヒジュラ暦3世紀)の後半に著作活動を行ったイブン・ワーディフ・ヤアクービーの著書『歴史*al-Ta'riḥ*』の日本語訳注である。連載の第一回となる今回については、解題にて著者および彼の著した『歴史』についての解説、そして、その第一部にあたる古代史部分のうち、アダムからノアとその子孫に至る人々の記述の訳注となる。なお、解題については亀谷が、第一回の日本語訳注部分については大塚が、それぞれ元となる原稿の作成を担当し、それをメンバー三人によって修正を加えたものである。

〈解題〉

1. 著者について

本稿で翻訳を行う『歴史』の著者は、9世紀に著述活動を行ったアフマド・ブン・アビー・ヤアクーブ・ブン・ジャアファル・ブン・ワフブ・イブン・ワーディフ・ヤアクービー *Aḥmad b. Abī Ya'qūb b. Ja'far b. Wāḥb b. Wāḍiḥ al-Ya'qūbī* (以下、著者をヤアクービーと呼ぶ) に比定されているが、ここではまず著者に関する情報について整理してゆく。

(1) 著者の生涯

『歴史』の著者が本文テキスト内で言及されるのは、その末尾、奥付部分の、「アッパース家の書記イブン・ワーディフの『歴史』の現存部分はこのにて終了した *tamma mawjūd min Ta'riḥ Ibn Wāḍiḥ al-Kātib al-'Abbāsī*」という箇所のみである¹。ただし、後述する第一に依拠すべき写本であるマンチェスター写本の奥付部分では *al-'Abbāsī* は後に付加されたように思われ、同様に付加部分として *Aḥmad b. Abī Ya'qūb b. Ja'far b. Wāḥb b. Wāḍiḥ al-Kātib al-'Abbāsī* と記されている²。上記の付加部分がどの段階で記されたかはわからないが、『歴史』の著者はこのアフマド・ブン・アビー・ヤアクーブ・ブン・ジャアファル・ブン・ワフブ・イブン・ワーディフ *Aḥmad b. Abī Ya'qūb b. Ja'far b. Wāḥb*

¹ L: II, 625. 以下、略号については本稿pp.133-134の凡例にある略号一覧を参照。

² M: 185b. 『歴史』の写本については本稿p.127-128を参照。

b. Waḍiḥに比定され、いくつかの異論はあるものの、多くの研究者に受け入れられている。

ヤアクービーに関する人物情報は必ずしも豊富とはいえない。彼の事績を記した伝記情報として最も詳しいものは、13世紀にヤークート Yāqūtが編纂した『文人辞典 *Mu'jam al-Udabā'*』の記述であるが、それも刊本にして6行程度のものでしかない³。以下、極めて断片的な伝記情報と、彼自身の著作から推定可能なことについてまとめておこう⁴。

ヤアクービーが生まれた年代と場所は不明である。伝記情報中に彼の出身地を明記したものはない。いくつかの先行研究ではバグダードにおいて生まれたとされるが、英訳の解題で述べられているように、推測の域を出ないものであろう⁵。彼がアルメニアにて子供時代を過ごしたというのもまたそれほど強い証拠があるわけではない⁶。

ヤアクービー自身は、別の著作である『諸国誌 *Kitāb al-Buldān*』の中で、彼が子供時代から様々な地域を旅して、見聞を広めた、ということを書いているが、特定の地域が示されているわけではない⁷。一方で、『諸国誌』の記述において、アルメニアの記述が豊富であることから、彼の人生のある時期において一定以上の期間アルメニアに滞在していたこと、またトゥールーン朝 (254–292/868–905) 下のエジプトに関する記述が詳細であることから、晩年はトゥールーン朝に仕えた書記であったと推定されている。

ヤアクービーの没年についても不明瞭である。ヤークートは284/897–8年没と伝えているが、ヤアクービーの著作からの引用と考えられる記述には、トゥールーン朝の滅亡や、アッバース朝カリフ・ムクタフィー (r. 289–295/902–908) についての詩などがあることから、ヒジュラ暦290年代以降であろうと考えられる⁸。

またヤアクービーについては、彼がシーア派の観点から『歴史』を記したとされることも多いが、伝記情報などにそのような記述があるわけではない。刊本の刊行によりヤアクービーの『歴史』が研究者に知られるようになると、その中にアリーの子孫の記述が項目立てられていることやケンブリッジ写本に見られる祈願文から、彼がシーア派であったという考えは一般に受け入れられていっ

³ Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Udabā'*, ed. Iḥsān 'Abbās, 7 vols., Beirut: Dār al-Gharb al-Islāmī, vol. 2, p. 557.

⁴ ヤアクービー自身に関する情報をまとめた記述としては、最近刊行された英訳の解題 (E: 9–22)、またC. Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 5 vols., Leiden: E.J. Brill, 1996 (2nd edition), I, pp. 258–260 (226–227 in old edition), S I, p. 405; M.Q. Zaman, “AL-YA'KŪBĪ,” *EI*²; D. Thomas et al ed., *Christian-Muslim Relations: A Bibliographical History*, Leiden: E.J. Brill, 2009–, vol. 2, pp. 75–78などがある。

⁵ ヤアクービーの生地をバグダードとする記事としては、*EI*²や*Christian-Muslim Relations*などのリファレンスとして信頼性が高いと考えられているものも含まれる。なお、英訳の解題を著したアンソニーとゴードンによると、この説はガストン・ワイエ Gaston Wietのヤアクービー地理書の翻訳に始まるという (E: 10)。al-Ya'kūbī, *Les Pays*, tr. Gaston Wiet, Cairo: l'Institut français d'archéologie orientale, 1937, pp. viii, xvi.

⁶ 英訳の解題によると、この説はブロッケルマンの記述に始まるという (E: 10)。Brockelmann, *Geschichte der arabischen Litteratur*, I, p. 259 (226 in old edition).

⁷ al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, pp. 232–233 (in Ibn Rusta, Abū 'Alī Aḥmad ibn 'Umar, *Kitāb al-A'lāq al-Nafīsa*, ed. M. J. de Goeje, Leiden: E.J. Brill, 1892).

⁸ E: 12.

た。この問題については、何人かの研究者が論文の主題としている。ミルウォード W. G. Millward は、ヤアクービーが『歴史』の編纂に用いたと考えられる情報源の分析から、彼がアリー裔に対して有利な情報を取捨選択して編纂したという結論を導き出した⁹。一方ダニエル E. Daniel はこの通説に対して、『歴史』のマンチェスター写本の祈願文などの分析を通じて、ヤアクービーがシーア派的傾向を持っていたとは言えないと主張した¹⁰。最新の研究となるアンソニー S. W. Anthony の論文では、主にムハンマドの後継者となった初期のカリフに関する記述を精査した上で、最終的にはヤアクービーにシーア派的傾向、すなわちアリーを正当な後継者とする考えがあったと見なしてよいと結論されている¹¹。ただし、これらの議論は「シーア派」の定義付け次第で揺らぐものでもあり、当時のアリー裔支持のあり方そのものの分析と総合して考える必要があるだろう。

(2) 著作

現存するヤアクービーの著作は『歴史 *al-Ta'rikh*』、『諸国誌 *Kitāb al-Buldān*』、『人々の自らの時代に対する翻案の書 *Kitāb al-Mushākalat al-Nās li-Zamāni-him*』の三作である。このうち『歴史』については、次節で詳述するため省略し、残りの二作について簡単に紹介する。

『諸国誌』は、イスラーム世界で書かれた地理書の中でも最初期にあたる著作である。現存する写本は三種類知られているが、完本としては伝わっていない¹²。刊本として標準的なものは、19世紀後半に編まれたアラブ地理学叢書 *Bibliotheca Geographorum Arabicorum* に採録されているデ・フーイェ M. J. de Goeje の校訂によるものである¹³。翻訳としては、部分訳ではあるものの長らくヴィエト G. Wiet による仏訳が用いられていたが、2018年に後述するヤアクービー著作のすべての英語への全訳が出版され、『諸国誌』はその第一巻に含まれている¹⁴。

『人々の自らの時代に対する翻案の書』は、初代正統カリフ・アブー・バクル (r. 11–13/632–634) からアッバース朝第十五代カリフ・ムウタミド (r. 256–279/870–892) に至るカリフたちに関する

⁹ W.G. Millward, “al-Ya‘qūbī’s Sources and the Question of Shī‘a Partiality,” *Abr-Nahrain* 12 (1971–72), pp. 47–74.

¹⁰ E. Daniel, “al-Ya‘qūbī and Shi‘ism Reconsidered,” in *‘Abbasid Studies: Occasional Paper of the School of ‘Abbasid Studies, Cambridge, 6–10 July 2002*, ed. J.E. Montgomery, Leuven: Peeters, 2004, pp. 209–231. なお同論文には、ダニエル以前に様々な研究者がヤアクービーをシーア派だと捉えてきた事例についても網羅的にまとめられている。

¹¹ S.W. Anthony, “Was Ibn Wāḍiḥ al-Ya‘qūbī a Shī‘ite Historian?: The State of the Question,” *al-‘Uṣūr al-Wuṣṭā* 24 (2016), pp. 15–41.

¹² 三種の写本はミュンヘン写本 (Munich, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. Arab. 959)、ベルリン写本 (Berlin, Staatsbibliothek zu Berlin, Or. Oct. 1833)、イスタンブル写本 (Topkapı Palace Library, Ahmet III 2403/2) であり、ミュンヘン写本が残り二写本の祖本となっている (E: 26–27; C. Brockelmann, *Geschichte der Arabischen Litteratur*, S I, p. 405)。

¹³ ヤアクービーの『諸国誌』はイブン・ルスタ Ibn Rusta の地理書の校訂と合本されて刊行され、その表題はイブン・ルスタの地理書となっている。Ibn Rusta, Abū ‘Alī Aḥmad ibn ‘Umar, *Kitāb al-A‘lāq al-Nafīsa*, ed. M. J. De Goeje, Leiden: E.J. Brill, 1892.

¹⁴ Matthew S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍiḥ Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.

短い逸話を時代順に並べた作品である。この著作については、ミルウォードによって校訂および英訳が行われているほか¹⁵、2018年に刊行された英訳版においても訳し直されている。

その他、ヤーケートによると、彼には『歴史』の他に『過ぎ去った共同体の諸情報の書 *Kitāb fi Akhbār al-Umam al-Sāliḥa*』という著作があったとされるが¹⁶、これが、現在我々に伝わっている『歴史』のイスラーム以前について記した第一部に当たるのか、あるいは別の著作であるのかは不明である。

2. 『歴史』について

(1) 『歴史』の構成

『歴史』の構成は、ムハンマド以前のことを記す「古代史」部分とそれ以後の「イスラーム史」部分の二つに大きく分けられる。「古代史」部分の冒頭には写本時点で欠落があるため、残念ながらその序にあたる記述は失われてしまっている。しかし、「イスラーム史」部分冒頭には、「イスラーム史」部分に関する序が記されており、そこでは「この世の存在の始まり、先行する諸共同体、分裂した諸王国、諸民族に分かれた理由についての古くからの情報をまとめた私たちの第一の書が終わり」と書かれているため、著者自身が二部構成を意識していたことは間違いないだろう¹⁷。このことから、ヤアクービーの『歴史』は、既に存在していたムハンマド以降の歴史叙述に対して、それ以前の古代史を接合する試みと見なすことができる¹⁸。

古代史部分の内容は大きく分けて二つに分けられる。冒頭のアダムの記述からイエスの記述までは、旧約聖書に基づくユダヤ教の系譜が語られ、それが直線的にイエスの伝記に接続されるまで続いてゆく。その後には、「シリアの諸王」「モスルとニネヴェの諸王」といった様々な地域の事情がそれぞれの地域ごとに語られ、最後にアラブの章が配されて、第二部冒頭のムハンマド伝部分へと接続するようになっている。

なお、第一部古代史部分のライデン版刊本での大まかな内容を示すと以下の通りとなる。

¹⁵ al-Ya'qūbī, *Mushākalat al-Nās li-Zamāni-him*, ed. William G. Millward, Beirut: Dār al-Kitāb al-Jadīd, 1962; William G. Millward, "The Adaptation of Men to Their Time: An Historical Essay by al-Ya'qūbī," *Journal of the American Oriental Society* 84-4 (1964), pp. 329-344.

¹⁶ Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Udabā'*, vol. 2, p. 557.

¹⁷ L: II, 2. ただし、マンチェスター写本においては、20a 末尾において第二巻 al-juz' al-thānī に続く旨が朱字で記されており、20b はバスマラから開始されている。

¹⁸ ただしマンチェスター写本においては、概ね20葉程度ごとに巻 juz' の区切りが挿入されており、全体で十巻に分割されている。これは上記の第一部、第二部の境界と一致していないことから、ヤアクービーの元々の著作にあった区分ではなく、書写の過程で行われた区分であろうと考えられる (E: 25)。

旧約伝承～イエスまで

諸国の歴史

アダム, pp.2-10 ノア, pp. 10-21 アブラハム, pp. 21-31 モーセ, pp.31-46 モーセ以後の預言者たち, pp.46-53 ダヴィデ, pp. 53-60 ソロモン, pp. 60-64 ソロモン以降の諸王, pp. 64-73 イエス, pp. 73-90	シリアの諸王, p.90 モスルとニネヴェの諸王, p.90 バビロンの諸王, pp.90-92 インドの諸王, pp.92-106 ギリシア人たち, pp. 106-161 ギリシャとローマの諸王, pp. 161-164 ローマの諸王, pp. 164-171 キリスト教徒のローマの諸王, pp. 171-178 ペルシアの諸王, pp. 178-203 ジャルバーの諸王, pp.203-204 中国の諸王, pp.204-210 コプトのエジプトの諸王, pp.210-215 ベルベルとアフリカの王国, pp.215-216 エチオピアとスーダンの王国, pp.216-217 ブジャの王国, pp.217-220 イエメンの王国, pp.220-234 シリアの諸王, pp.234-236 ヒーラの諸王, pp.236-242 キンダ族の戦い, pp.242-252 イスマーイールの子ら, pp.252-294 アラブの諸宗教, pp.294-299 アラブの支配者たち, pp.299-300 アラブの当て矢, pp.300-304 アラブの詩人たち, pp.304-313 アラブの市場, pp.313-315
---	--

第二部イスラーム史部分は、ムハンマド伝から始まり、その後は各カリフごとに章分けされている。その大きな枠組みの中に、アリー家のイマームたちに関する情報が埋め込まれており、その死亡に関するタイトルの後に記述される。アリーを除く三人の正統カリフ、および、ウマイヤ朝、アッバース朝期のカリフのタイトルは「～の日々ayyām」で記される一方、アリーとハサンについては「～のカリフ期khilāfa」という語が用いられている。

なお、第一に依拠すべき写本となるマンチェスター写本（後述）では、節タイトルとみなしうる箇所について、朱字で記されていることが多いが、特に第一部古代史部分については、必ずしも統一の取れたものとなっているわけではないため、本稿の中の節分けについては原則として底本とした刊本に基づいて行っている。

(2)『歴史』の写本

現存する『歴史』の写本は以下の二種である¹⁹。

¹⁹ 写本に関しては英訳の写本に関する解題を参照 (E: 23-26)。なお、ブロッケルマンがE¹においてトルコのトプカプ宮殿図書館に、以下の二種の写本とは別の写本が所蔵されていると記しているが、この写本の現存は

M: マンチェスター写本 (Manchester, John Rylands Library, Arabic 801) ²⁰

26x17cm、185葉、31行、1350年頃書写(?)

C: ケンブリッジ写本 (Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10) ²¹

29.2x20.2cm、239葉、31行、1096年ラビーウ・アルアーヒル月末日/1685年4月4日書写

初め、ハウツマ M. Th. Houtsma によるライデン版の刊本の底本として用いられたのはケンブリッジ写本であった。しかし、1957年には、ジョンストーン T. M. Johnstone によってマンチェスター写本がより古いものであって、より重要な写本であることが指摘された²²。ジョンストーンが指摘するように、実際にその二つの写本を比較しながら読んでみると、マンチェスター写本がよりよいテキストを伝えていることは明らかである。しかしながら、マンチェスター写本を用いて校訂テキストとして全面的に更新する試みはなされず、ヤアクービーの著作を専門に扱う研究を除いては、依然としてライデン版のテキストが使用される状況は続いた。

両写本はいずれも冒頭の序文部分を欠いており、アダムに関する逸話の文の途中から始まっているため、ヤアクービーが第一部を記すにあたって意図したことなどについては不明となっている。なお、マンチェスター写本においては、冒頭が欠葉になっている一方、ケンブリッジ写本では、その体裁から考えて欠葉ではないものの、冒頭がかけている写本から写したために途中から始まる形になっている、と考えられる。また、赤字箇所処理などからも、ケンブリッジ写本はマンチェスター写本から書き写されたものであると見なしはば間違いないであろう。

なお、本翻訳では、マンチェスター写本をM、ケンブリッジ写本をCと略して示すこととし、底本とする刊本との間に異同がある場合は、それを注釈で示した(詳細は凡例を参照されたい)。

(3)『歴史』の刊本・翻訳

『歴史』のテキスト全体の校訂としては、ライデン版が挙げられる。

Ibn Wadhīh qui dicitur al-Ja'qūbi, *Historiae*, 2 vols., ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883 (repr. 1969)

これはオランダの東洋学者ハウツマの手になるもので、1883年に刊行された。ハウツマは、1879年から1901年にかけてデ・フーイェの主導のもと行われていたタバリー『諸預言者と諸王の歴史 *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*』のライデン版刊本の校訂にも参加し、第三シリーズの中のヒジュラ暦131-158年の部分を担当していた。その一方で、ヤアクービーの校訂に関して、ハウツマはデ・フー

確認できていない (R. Ebied and L. Wickham, "Al-Ya'kūbī's Account of the Israelite Prophets and Kings," *Journal of Near Eastern Studies* 29 (1970), p. 80, n.3)。

²⁰ D. D. A. Mingana, *Catalogue of the Arabic Manuscripts in the John Rylands Library Manchester*, Manchester: Manchester University Press, 1934, pp. 372-374.

²¹ E. G. Browne, *A Hand-list of the Muḥammadan Manuscripts, Including All Those Written in the Arabic Character, Preserved in the Library of the University of Cambridge*, Cambridge: University Press, 1900, p. 25.

²² T. M. Johnstone, "An Early Manuscript of Ya'kūbī's "Ta'rih", " *Journal of Semitic Studies* 2-2 (1957), pp. 189-195.

イエの助力を大いに得たという²³。ハウツマの校訂テキストは、前述のように信頼性に劣るケンブリッジ写本のみを用いたものであるが、そこに加えられたクルアーン引用に関わる注釈や他の著作との比較による単語の確定については未だ有用な部分も多く、現在に至るまで、少なくとも欧米の初期イスラーム研究者の間では定本として用いられている。本訳注においても、両写本、特にマンチェスター写本を常に参照しているものの、原則としてこのライデン版刊本を底本として翻訳を作成した。

その後、アラブ世界においても、おそらくはハウツマの校訂テキストを利用して、いくつかの刊本が刊行されているが、ハウツマの校訂以上に用いられるようにはなっていない。アラブ圏で出版された刊本については以下のようなものがある。

Ta'rīkh al-Ya'qūbī, 3 vols., Najaf: Maṭba'at al-Ghurūrī, 1939.

Ta'rīkh, 2 vols., Beirut: Dar al-Ṣādir, 1960.

Ta'rīkh al-Ya'qūbī, 2 vols., ed. 'Abd al-Amīr Muḥannā, Beirut: Mu'assasat al-A'lamī, 1993.

翻訳としては、20世紀にその第一部古代史部分についての抄訳が行われている。

G. Smit, *'Bijbel en legende' bij den arabischen Schrijver Ja'qubi, 9th eeuw na Christus*, Leiden: E.J. Brill, 1907, pp. 1–105.

は第一部古代史部分のイエスに至るまでのオランダ語への翻訳（未見）。

D. M. Donaldson, “*Al-Ya'qubi's Chapter about Jesus Christ*,” in *The MacDonald Presentation Volume*, ed. W. G. Shellabear et al., Princeton: Princeton University Press, 1933, pp. 89–105.

はイエス伝部分の英語への抄訳。

R. Ebied and L. Wickham, “*Al-Ya'qūbī's Account of the Israelite Prophets and Kings*,” *Journal of Near Eastern Studies* 29 (1970), pp. 80–98.

はモーセから始まりイエスの記述の直前までの英語への部分訳。

A. Ferré, “*Al-Ya'qūbī et les Evangiles*,” *Islamochristiana* 3 (1977), pp. 65–83.

はイエス伝のフランス語への部分訳。

A. Ferré, *L'histoire des prophètes d'après al-Ya'qūbī. D'Adam à Jésus*, Rome, 2000.

は同訳者によるアダムからイエス伝に至るまでのフランス語への部分訳（未見）。

全訳としてはまず、ペルシア語への翻訳である

tr. Moḥammad Ebrāhīm Āyatī, *Tārīkh-e Ya'qūbī*, 2 vols., Tehran: Bongāh-e Tarjome va Nashr-e Ketāb, 1969.

がある。

²³ ハウツマの履歴についてはヨーハン・フェック著、井村行子訳『アラブ・イスラーム研究誌：20世紀初頭までのヨーロッパにおける』（法政大学出版局、2002年）289–290頁を参照。またハウツマのタバリー『諸預言者と諸王の歴史』のライデン版刊本校訂への参加については、同書183–185頁を参照。

英語への全訳は近年初めて行われた。

Matthew S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍiḥ Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.

これは現存するヤアクービーの三つの著作をすべて英訳したものであり、そのうち第二巻が『歴史』第一部の古代史部分、第三巻が『歴史』第二部のイスラーム史部分となっている。なお、写本などの情報については、第一巻の全体の解題部分に記されている。このゴードンらによる英訳では、参照すべき主要な写本としてマンチェスター写本が用いられるなど、現時点で最良の翻訳となっている。

翻訳に当たっては、全訳となっているゴードンらの英訳とペルシア語訳を主に参照しながら、適宜その他の翻訳も確認して最終的な訳稿を作成した。

〈訳注について〉

本訳注は、当初2015年より二年間の研究期間で行われた公募研究「中世イスラーム世界における「古代」の継承と創造」(新学術領域研究「現代文明の基層としての古代西アジア文明——文明の衝突論を克服するために——」(代表:常木晃)、課題番号15H00707)の中で、当該課題のメンバーである亀谷学、大塚修、松本隆志によって計画されたものである。当初、当該研究課題の終わる2017年3月にそれまで日本語訳を行っていた『歴史』古代史部分の一部(「イエス」「ペルシアの諸王」「イエメンの王国」)を、冊子として配布する予定であったが、諸般の事情により年度内の刊行は実現しなかった。その後、ゴードンらの英訳が刊行されたことにより、翻訳の出版に関して再検討が行われたが、日本語訳を出版する意義は失われていないという結論に至ったため、若干のインターバルを経た2017年度末より日本語訳の刊行に向けた動きが再開され、既に日本語訳が手元にある部分からではなく、『歴史』の冒頭から日本語訳の掲載を行うという形で、新規書き直しが行われた。また、平成29(2017)年度弘前大学若手・新任研究者支援事業として採択された課題「イスラーム以前のアラブ・ペルシア関係とアラビア語世界史叙述」の成果の一部でもある。これらの研究助成に感謝したい。

ヤアクービーの『歴史』は、必ずしも典型的とはいえないものの、アッバース朝中期までのイスラーム世界において、どのようにイスラーム以前の「古代史」とイスラーム勃興以後の歴史がつながり合わされて語られたのか、ということについての一つの例を提示してくれる史料である。英訳としては、大著であるタバリー『諸預言者と諸王の歴史』をはじめ、いくつかの翻訳が既に行われているが、本邦では未だこの時期のイスラーム世界における「普遍史」「世界史」の学術的な日本語訳注は行われていない²⁴。その意味で、この日本語訳注が、初期イスラーム時代史を学ぼうとする者

²⁴ タバリーの『諸預言者と諸王の歴史』の古代史部分については、座喜純・岡島稔両氏による翻訳がAmazon Kindleにて購入可能な電子版として、現時点でその冒頭からペルシャ諸王伝部分まで作成されている(アブー・ジャアファル・タバリー著、座喜純・岡島稔訳『歴史』第一巻～第四巻)。ただし、注釈は付されていない。

のみならず、広く「歴史」というカテゴリーで括られる著作やそれについての考え方に関心を持つ人々にとって、イスラーム世界に関して参照できるものとなれば幸いである。

〈今回の翻訳部分の解説〉

本号に掲載する翻訳は、いわゆる『旧約聖書』「創世記」に遡る情報を基盤とする、神による天地創造からアダムとイブの逸話、ノアの洪水を経てアブラハムの直前までの部分である。

これらの部分について、ヤアクービーは、キリスト教徒の手によるシリア語の著作『宝の洞窟 *M'arrat Gazzē*』の情報に依拠しているということが、古くから指摘されてきた²⁵。

『宝の洞窟』はその写本においてシリアのエフライム（西暦4世紀頃）に帰されることがあるものの、現在までその著者は不明とされている作品であり、アダムからイエス・キリストに至るまでの情報が記されている著作である²⁶。ヤアクービーはこの著作を典拠として示してはいないが、両者に共通する二つの特徴から、『宝の洞窟』あるいはそれを引用した著作を参照して『歴史』の当該部分を記したものと考えられる。

共通する特徴の第一は、アダムの遺体が「宝の洞窟」に運び込まれ、それを守ることがその子孫に重要な役目として受け継がれるという語りの構造である。ヤアクービーの『歴史』においては、その洞窟について、アラビア語で二度 *maghārat al-kanz* (=宝の洞窟) として言及されている²⁷。

そしてもう一つは、アダムから始まる旧約的な伝承記述の中に、天地創造から1,000年ごとに、彼が何歳の時代に1,000年が経った、2,000年が経った、という千年紀の区切りを明示する記述が挟まれることである。これは初期のキリスト教徒が記した歴史叙述に現れるものであり、ヤアクービーは4,000年までそれを記している(5,000年、6,000年については記載されていない)。これもまた、

なお、アラビア語で記された中世イスラーム世界の歴史叙述の日本語訳としては、イブン・アッティクタカー著、池田修ら訳『アルファフリー：イスラームの君主論と諸王朝史』全二巻（平凡社、2004年）がある。
²⁵ G. Smit, 'Bijbel en Legende' bij den arabischen Schrijver Ja'qubi, 9th Eeuw Christus, Leiden: E.J. Brill, 1907, pp. 111–114, 128–134; A. Götze, "Die Nachwirkung der Schatzhöhle," *Zeitschrift für Semitistik* 3 (1924), pp. 60–71; S. H. Griffith, *The Bible in Arabic: The Scriptures of the "People of the Book" in the Language of Islam*, Princeton: Princeton University Press, 2013, pp. 184–186.

上記のグリフィス Griffith によると、シリア語聖書であるベシッタとの並行箇所もあり、その箇所については、Smit, 'Bijbel en Legende', pp. 115–117 に列挙されているという (Griffith, *The Bible in Arabic*, p. 184)。

²⁶ シリア語刊本として、*Die Schatzhöhle aus dem syrischen Texte dreier unedirten Handschriften ins Deutsche übersetzt und mit Anmerkungen versehen*, ed. C. Bezold, 2 vols., Leipzig: J.C. Hinrichs, 1883–1888 および *La Caverne des Trésors : les deux recensions syriaques*, Andreas Su-min Ri (ed.), CSCO 486–7/Syr. 207–8, Leuven: A. Peeters, 1987 があるほか、英訳 *The Book of the Cave of Treasures: A History of the Patriarchs and the Kings, Their Successors, from the Creation to the Crucifixion of Christ, Translated from the Syriac Text of the British Museum MS. Add. 25875*, ed. and tr. E. A.W. Budge, London: Religious Tract Society, 1927、解題及び注釈として Andreas Su-Min Ri, *Commentaire de la Caverne des Trésors: Étude sur l'histoire du texte et de ses sources*, CSCO 581/Subs. 103, Leuven: A. Peeters, 2000 がある。またシリア語歴史叙述伝統の中での位置付けについては M. Debié, *L'écriture de l'histoire en Syriaque: Transmissions interculturelles et constructions identitaires entre hellénisme et islam*, Leuven: A. Peeters, 2015, pp. 346–348 も参照。

²⁷ L: I, 1, 16.

『宝の洞窟』の叙法を踏襲したものであると考えられる。

また、ヤアクービーの歴史には『旧約聖書』本文テキストや西暦1世紀のユダヤ人歴史家であるフラウィウス・ヨセフスが天地創造から彼自身の時代までを記した『ユダヤ古代誌』などにも見あたらない記述が見られるが、その中のいくつかのものは『宝の洞窟』に基づいたものと考えられる。

なお、「宝の洞窟」に関する言及はタバリーやマスウーディーの歴史書の中のアダムに関する記述にも登場する²⁸。これがヤアクービーの『歴史』からの影響であるのか、ヤアクービーの『歴史』以前からイスラーム世界における『旧約聖書』関連の捉え方の中で一般的なものであったかは不明であるが、当時のアラビア語歴史叙述に対するシリア語文献からの影響は従来考えられてきたよりも大きかったと想定すべきかもしれない。

とはいえ、ヤアクービーは『宝の洞窟』を引き写すに留まっていたわけではなく、イスラームの立場、また9世紀という時代を背景とした知識をこの部分にも織り込んでいる。

例えば、アダムの墮天やノアの洪水などが語られる際に、それぞれの人物に関してクルアーンの中で言及がある場合、クルアーンの文言を用いながら逸話を書き直している。ヤアクービーが『宝の洞窟』などの典拠を直接シリア語で参照していたかはわからないが、彼自身がアラビア語で著述する時に、クルアーンの文言を交えながら書き記していったということになるだろう。

また、エノクがクルアーンに伝えられる預言者イドリースであることを言及したり²⁹、ナホルの時代の記述において、アラビア半島にいたとされるアード族の預言者フードやサムード族の預言者サーリフの逸話を挿入するなど³⁰、旧約聖書の系譜に基づく直線的な歴史叙述の中に、イスラーム的色合いの濃い伝承をどのように配置してゆくかという点にも腐心していたように見受けられる。

その他、ノアの三人の息子であるセム、ハム、ヤベテから様々な地域の民族が生まれてきたという語りは、旧約聖書でも同様の語りが行われるが、その中に登場する地域や民族名は、ブルガール Bulghār や中国 al-Ṣīn などを含むものであり、9世紀のアッバース朝期における世界認識の広がりを反映したものとなっている³¹。

²⁸ タバリーはアダムの墓の場所については意見が分かれているとしつつ、一説として、「彼はメッカにあるアブー・クバイスの洞窟 ghār に埋葬された。それは「宝の洞窟 ghār al-Kanz」という洞窟であった」と記している (Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E.J. Brill, 1879–1901, serie 1, pp. 162)。マスウーディーは「宝の洞窟」という表現は使わないが、アブー・クバイス山に葬られた説を記している (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādīn al-Jawhar*, ed. Ch. Pellat, 7 vols., Beirut: Manshūrāt al-Jāmi'at al-Lubnānīya, 1965–1979, vol. 1, p. 41)。

²⁹ L: I, 9.

³⁰ L: I, 19–20.

³¹ L: I, 13.

〈凡例〉

- 本稿は、ヤアクービーの著書『歴史 *al-Ta'rikh*』の日本語訳である。訳注にあたっては、M. Th. Houtsma の刊本 (Leiden: E. J. Brill, 1883; repr. 1969) を底本とする。なお、本訳注での「刊本」は原則としてこのライデン版刊本を指すこととする。
- 底本とした刊本とあわせて、現存する二つの写本、特に、よりオリジナルなテキストを保存していると思われるマンチェスター写本を参照した。刊本と写本の間、あるいは写本間の相違については、脚注で示したが、その際マンチェスター写本についてはM、ケンブリッジ写本についてはCという略号で示した上で、そのフォリオ番号を付した。
- 必要に応じてゴードンらによる英訳 (E.J. Brill, 2018) を参照した。その際は脚注においてEという略号で示し、ページ数を付した (英訳は三巻にわたり、『歴史』は第二巻、第三巻にあたるが、ページ数が全巻を通じて連続しているため、巻数は省略する)。その他の翻訳については、通常どおり文献を挙げた。
- [] はテキスト上の脱落を示し、あるいはそれを補う場合に用いる。
- () は文脈や指示するものを明確にするための補いを示す。
- [] 中の数字によって、底本となる刊本での当該ページの記述のおおまかな開始点を示した。
- クルアーンからの引用箇所については、《 》で囲んだ上で太字とし、脚注にて略号Q、章番号、節番号によって参照元を示した。なお、日本語訳は中田考監修、中田香織・下村佳州紀訳『日亜対訳クルアーン：[付] 訳解と正統十誦誦注解』(作品社、2014年) に基づくが、文脈に合わせて若干の修正を加えた部分もある。
- アラビア文字のラテン文字転写については、大塚和夫ら編『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年) に準ずる。日本語への音写についても原則として同書の転写法に準ずるが、定冠詞の後の=についてはこれを記さない方式を採用。
- 初出の固有名詞や、訳出上重要と思われる単語や文については、その直後にアラビア語のラテン文字転写を付した。
- 旧約聖書に記述のある人名については原則として、松田伊作ほか編『旧約聖書』全15巻 (岩波書店、1997-2004年) に従う。これに記述のないものについては、アラビア語原音の転写を原則とする。
- 地名については一般に用いられているもの (例：メッカ、メディナ) を除いてアラビア語の原音に従った。
- 訳注本文の段落については、刊本の一段落が極めて長いため、訳者が内容上適切であると判断した箇所で段落を分けた。
- 祈願文については、統一された基準で取捨することが困難であったため、原則として省略することとした。
- アラビア文字をラテン文字に転写する際に、母音が不明な場合は、その単語に含まれる文字の音

価をそのまま大文字で記した。また、弁別点等の問題を含めて、形を示して比較することが必要と判断した場合は、アラビア文字で記す場合もある。

- 本稿で文献表示の際に用いられる略号は以下のとおりである。なお、事典類については、文献表示の際はその項目名で表示し、ページ数は省略する。

L: al-Ya'qūbī, *al-Ta'rikh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883 (repr. 1969). (ライデン版刊本)

M: Manchester, John Rylands Library, Arabic 801. (マンチェスター写本)

C: Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10. (ケンブリッジ写本)

E: M. S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wāḍiḥ Al-Ya'qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E.J. Brill, 2018.

EI¹: *The Encyclopaedia of Islam*, 5 vols., ed. M. Th. Houtsma et al, Leiden: E.J. Brill, 1913–1938.

EI²: *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 11 vols., ed. C.E. Bosworth et al., Leiden: E.J. Brill, 1960 (1954–2008).

EIr: *Encyclopaedia Iranica*, ed. Ehsan Yarshater, London & Boston: Routledge & Kegan Paul, 1982–. (ただし多くの場合ウェブ版 <http://www.iranicaonline.org/> を利用した)

EIs: Wilferd Madelung & Farhad Daftary ed., *Encyclopaedia Islamica*, Leiden: E.J. Brill, 2008–.

『新イスラム事典』: 嶋田襄平ら編 『新イスラム事典』(平凡社、2002年)

『岩波イスラーム辞典』: 大塚和夫ら編 『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)

- 本稿の記述においてはシリア暦とヒジュラ暦の双方が用いられている。その月名は以下のとおりである。なお、シリア暦もアラビア語での読みを示している³²。

シリア暦	ヒジュラ暦
1 ティシュリーン・アルアウワル	1 ムハッラム
2 ティシュリーン・アルアーヒル	2 サファル
3 カーヌーン・アルアウワル	3 ラビーウ・アルアウワル
4 カーヌーン・アルアーヒル	4 ラビーウ・アルアーヒル
5 シュバート	5 ジュマダー・アルウーラー
6 アザール	6 ジュマダー・アルアーヒラ
7 ニーサーン	7 ラジャブ
8 アイヤール	8 シャアバーン
9 ハズィーラーン	9 ラマダーン
10 タムーズ	10 シャウワール
11 アーブ	11 ズー・アルカアダ
12 アイルール	12 ズー・アルヒッジャ

³² シリア暦の月名のカナ表記は山本啓二、矢野道雄訳「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル＝ビール＝ニー著『占星術教程の書』(2)」『イスラーム世界研究』5/1-2(2012)、328頁に従った。

〈訳注〉

[2] 慈悲あまねく慈悲深き神の御名において³³

〔脱落〕³⁴。彼〔アダム Ādam〕は、神が創ったものの中で、樂園 al-janna³⁵以外の何ものにも満足しなかった。アダムは樂園にある恩恵を見て、「もし永遠に留まる手段 sabīl³⁶があったならばなあ」と言った。そして、悪魔 iblīs がその言葉を彼から聞いた時、悪魔は彼に欲望を向け、そして涙した。アダムとエバ Hawwā は彼が涙しているのを見て、彼に対して「何がお前を悲しませるのか」と言った。すると彼は言った。「お前たちはここを去ることになるだろう」と。そして、《「おまえたち二人の主がおまえたちにこの木を禁じ給うたのは、おまえたちが天使となるか、永遠に生きる者となるからにはほかならない」。そして彼は二人に誓った。「まことに私はおまえたちに対する忠告者たち（の一人）である」》³⁷。アダムとエバが身につけていた衣は光であった。《それで二人が木（の実）を³⁸味わうと陰部が顕となった》³⁹。ところで、啓典の民の考えでは、アダムが樂園に入る前に地 ard に居たのは3時間で、木〔の実〕を食べた結果、二人の陰部が二人に顕になる以前に3時間、アダムとエバは恩恵と寛大さの中に居たのである。アダムの陰部が顕になった時、木の葉を手に取り、それを自らの上に置き、叫んだ。「見てください、主よ、私は裸であります。私は貴方が私に禁じた木〔の実〕を味わってしまったのです」と。すると神は「お前が創られた地に戻れ。われは空に住まう鳥と海に住まう魚を、お前とその子孫に支配されるものとした」と言い、アダムとエバを二人が居たところから追放した。それは、[3] 啓典の民が語っているところでは、金曜日に9時間で起こった出来事である。

二人は地上に降り立ったが、彼らは悲嘆に暮れ涙していた。さて、二人が降り立ったのは、地上の山々の中でも、樂園により近い山の上だった。その山はインドの地 bilād al-Hind にあった。一方

³³ この文句はマンチェスター写本には存在しない。マンチェスター写本の冒頭部（おそらくは1葉）は脱落しており、‘alā Ādam という文句に始まる。冒頭の文章の脱落后、この文句の上部に、後世の者の手により Ta’rīkh Ahmad b. Abī Ya’qūb b. Ja’far b. Wahb b. Wādiḥ al-‘Abbāsī al-Kātib という書名が書き込まれている (M: 1a)。一方、ケンブリッジ写本では、この書名の最後に見られる祈願文にさらに別の祈願文が重ねられ、これを正式な書名としてタイトルページに記されている (C: 1a)。さらには、本来は文章途中であるはずの ‘alā Ādam という文句が冒頭部に置かれ、その前にバスマラが加筆された形になっている (C: 1b)。ただし、校訂者は写本に見えるバスマラの後半部は翻刻していない。

³⁴ 冒頭に ‘alā al-Ādam とあるが、これ以前の文章がないため、訳出は不可能。

³⁵ 両写本では、ALJYH (M: 1a; C: 1b)。英訳では写本に基づいたと断った上で「蛇 al-ḥayya」と訳出されている (E: 261)。『宝の洞窟』ではここで樂園 pardawsā に満足していることが述べられているため、刊本の解釈を採った (Die Schatzhöhle, p. 22)。

³⁶ 両写本では、sabīlan (M: 1a; C: 1b)。

³⁷ Q 7: 20–21。

³⁸ 校訂者はこの部分が『クルアーン』からの引用であることに気付かなかつたらしく、前置詞 min を補っている。引用でなかったとしても、そもそも、dhāqa は直接目的語をとれる動詞であるので、この補足は不要ではないか。

³⁹ Q 7: 22。

で、メッカ Makka に位置する山 アブー・クバイス Abū Qubays⁴⁰ の上だったと主張する者たちもいる。アダムが住んだのは、その山にある「宝の洞 maghārat al-kanz」⁴¹ と彼が名付けた洞窟で、神にその洞窟を神聖なものとするように祈願した。また、アダムが降り立った時、樂園を離れたことに対して彼は涙を多く流し、悲嘆に暮れ続けたと伝える者もいる。それから、神は彼に啓示を授けた。アダムは言った。「あなたのほかに神はありません。称えあれ」⁴¹。称賛あれ。《私は悪を行い、そして自分自身に不正をなしました。私を赦し給え》⁴²。あなたは《よく赦し給う慈悲深い御方》⁴³ と。《それからアダムは彼の主から御言葉を授かり、彼の許に顧み戻り給うた》⁴⁴。神は《彼を選び》⁴⁵、彼がかつて住んでいた樂園から彼に黒石を授けた。そして、それをメッカに運んで行き、黒石のために神殿を建てるように命じた。かくして、彼はメッカに入り、神殿を建て⁴⁶、その周りを廻ったのである。神は彼に対して、神のために犠牲を捧げ yaḥḥā⁴⁷、神に呼びかけ、神の栄光を称えるように命じた。その後、ジブリール Jibrīl がアダムとともに出発し、アラファート 'Arafāt⁴⁸ で立ち止まった。ジブリールはアダムに「この場所こそが、お前の主が自分のために立ち止まるように命じた場所である」と言った。そして、彼とともにメッカに向かった。すると、悪魔が彼の前に立ちはだかった。ジブリールはアダムに「投げなさい」と言った。アダムは小石を悪魔に投げつけた。それからアダムはアブタフ Abtāḥ⁴⁹ に入った。そこでは天使たちが彼を迎え入れ、言った。「アダムよ、お前の巡礼はつつがなく実行された。我らはお前の前に二千年間もこの神殿に巡礼を行っていたのだ」と。

神はアダムに小麦を授け、自ら働いて食べるように命じた。そこでアダムは、耕して種を蒔いた。その後刈り入れた。その後脱穀した。その後挽いた。その後こねた。その後パンを焼いた。彼はやり遂げた時、額に汗をかいていた。その後食べたのであった。空腹が満たされると、彼の腹の中にあつたものが重くのしかかった。すると、ジブリールが彼のもとに降りてきて、彼の両脚を広げた。彼の胃の中にあつたものが外に出ると、悪臭がした。そこで「この臭いは何か」と言うと、ジブリー

⁴⁰ メッカの東端に位置する聖なる山。ムスリムの伝承によれば、神に作られた最初の山で、アダムなど初期の人間がそこに葬られたとも言われる。また、月が裂けた時、この山の上にムハンマドが居たとされている (G. Rentz, "ABŪ QUBAYS," *EI*²)。

⁴¹ Q21: 87。刊本では『クルアーン』からの引用とはされていない。

⁴² Q28: 16。

⁴³ Q28: 16。『クルアーン』28章の以上の箇所はモーセの言葉であるが、単語が完全に一致している (E: 262)。刊本では『クルアーン』からの引用とされていない。

⁴⁴ Q2: 37。ただし刊本では、fa-tāba 'alay-hi が『クルアーン』からの引用とはされていない。

⁴⁵ Q20: 122。英訳では誤って「22節」だと注記されている (E: 262, n. 10)。

⁴⁶ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では wa banā al-bayt の文句が破損のため読めず (C: 1a)、刊本では角括弧で推測された文句が補われている。ただし当該箇所はマンチェスター写本には、wa banā al-bayt とあり (M: 1a)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。

⁴⁷ 両写本では、YDHR となっているが (M: 1a; C: 2a)、ここでは刊本に従った。

⁴⁸ メッカにある聖モスクから東に約25km離れた広大な原野。中央に位置するラフマ山では、地上に降りたアダムとエバが再会したとも言われる。メッカ寄りの場所にナミラ・モスクがあり、そこでは、巡礼期間中に巡礼の説教が行なわれる。巡礼月9日にはウクーフが行なわれる (森伸生「アラファ」『岩波イスラーム辞典』)。

⁴⁹ メッカからメディナ方面に向かって約6kmの地点にある地域 (A. Rafi'i & H. Lahouti, "AL-ABTAḤ," *EI*s)。

ルは彼に対して「小麦の匂いだ」と答えたのである。

アダムはエバと交わり、エバは身ごもって、[4]一人の男の子と一人の女の子を儲けた。その男の子はカイン Qābil と、女の子はルービザー Lūbidhā と名付けられた。その後彼女は身ごもり、一人の男の子と一人の女の子を儲けた。その男の子はアベル Hābil、女の子はイクリーマー Iqlīmā⁵⁰ と名付けられた⁵¹。アダムの子たちは成長し、結婚の年齢に至ると、アダムはエバに「カインに命じて、アベルとともに生まれたイクリーマーと彼を結婚させなさい。また、アベルに命じて、カインとともに生まれたルービザーと結婚させなさい」と言った。その結果、カインは、自分とともに生まれた姉妹とアベルが結婚したことについて、アベルを妬んだのであった。また、次のように伝える者もいる。神は、アベルに対して、楽園の天女を授け、彼女と結婚させた。一方で、カインに対しては、ジンニーヤ jinnīya⁵²を遣わし彼女と結婚させた。その結果、カインは、天女の件について、弟を妬んだのであった。するとアダムは二人に対して「犠牲を神に捧げなさい」と言った。そこでアベルは農作物の中からイチジクを捧げ、カインは家畜の中から最も良い羊を神のために捧げた。これに対し、神はアベルの生贄を受け入れた一方で、カインの生贄を受け入れなかった。そしてカインは、ますます妬み羨むようになった。悪魔 shaytān がカインに弟を殺すように唆すと、カインは弟の頭を石で砕き、殺害したのであった。それ故に、神はカインに対して立腹し彼を呪った。そして、聖なる山からノド Nūd⁵³と呼ばれる地へと追放した。アダムとエバは長い間アベルのことについて嘆き続け、それは、流れ出た二人の涙は河のようであったと言われるほどであった。

そして（また）アダムはエバと交わり、エバは身ごもり、一人の男の子を儲けた。それは、アダムが130歳になった後のことである。男の子はシェト Shīth⁵⁴と名付けられた。彼は子どもたちの中で最もアダムに似た者となった。その後アダムはシェトを結婚させ、彼には男の子が生まれた。それは、彼が165歳になった後のことである⁵⁵。男の子はエノシュ Anūsh と名付けられた。その後エノシュには男の子が生まれ、彼はケナン Qaynān と名付けられた。その後ケナンには男の子が生まれ、彼はマハラルエル Mahlā'il と名付けられた。これらの者たちはアダムの生前、アダムの時代に生まれたのであった。

⁵⁰ 両写本では Iqlīmā となっているが (M: 1a; C: 2a)、ここでは刊本に従った。以下同様

⁵¹ ルービザーとイクリーマーの名前については、『旧約聖書』やフラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』には登場しないが、『宝の洞窟』には同様の名前で登場する (*Die Schatzhöhle*, p. 34)。

⁵² ジンニーヤは女性のジンのこと。

⁵³ 両写本では ANWR となっているが (M: 1a; C: 2a)、『旧約聖書』「創世記」4章16節の記述をふまえ、ここでは刊本に従った。ノドの地はエデンの東に位置するとされる。

⁵⁴ 両写本にはシェトの名の上に「その意味は神の贈物 tafsīr-hu hibat Allāh」という文句があるが (M: 1b; C: 2a)、もともと本文にあった記述が補われたものなのか、後世の書き込みであるのかは不明。

⁵⁵ 『旧約聖書』「創世記」5章3-7節では、アダムが130歳の時にシェトが生まれ、そのシェトが105歳の時にエノシュが生まれたとなっており、つまり、これはアダムが235歳の時だということになる。これについて言及のある他の文献でも年齢についてはかなりの異同があり、この箇所でもアダムとシェトのどちらを指しているかは不明である。

死がアダムに訪れた時、息子のシェト、その子たち、[5]その孫たちがアダムのもとにやって来た。するとアダムは彼らのために神の祝福があるように祈り、神の祝福を祈願した。そして、シェトに遺言をして、命じた。「私の身体を守り続けなさい。死んだ暁には宝の洞窟に安置しなさい。そして、お前の子たちや孫たちに、山から下りる時には私の身体を恭しく運び出し、大地の中央に安置するように言い遣し、彼らが死んだ際にも後の世代に言い遣すようにしなさい」と。さらに、アダムは息子シェトに命じた。「私の後、一族の指導者となり、神を敬い神を良く崇拜するように命じなさい。そして、呪われしカインとその一族と交わることを禁じなさい」と。その後、アダムは自分の子どもたちと彼らの妻や子どもたちのために神の祝福があるように祈り、死んだ。それは、ニースーン月6日金曜日の、彼が創造されたまさにその時刻のことであった。彼の生涯は合計930年間であった。

[アダムの子シェト]⁵⁶

アダムが没した後、息子シェトが指導者となった。シェトは常に、彼の民に神を敬い、敬虔な行いをするように命じていた。ところで、彼らは神を称え崇拜していた。そして、彼らの妻や子どもたちの間には、敵意をむき出しにすること、お互いに妬みあうこと、お互いに憎しみ合うこと、疑うこと、嘘をつくこと、約束を破ることはなかった。彼らの一人が誓いを立てようとする時には、「まさにアベルの血にかけて *lā wa-dam Hābil*」と言っていた。死がシェトに訪れた時、彼の息子とその子孫、すなわち、エノシュ、ケナン、マハラルエル、イエレド *Yarad*、エノク *Akhnūkh*、そして、彼らの妻⁵⁷や子どもたちが彼のもとにやって来た。シェトは彼らのために祈り、神の祝福を祈願した。そして、彼らに命じて、アベルの血にかけて神に誓わせた。彼らのうち誰一人としてこの聖なる山から下りることのないように、彼らの子孫のうち誰一人としてこの山から下りさせないように、そして、呪われしカインの一族と関係を持つことのないように、と。そして、息子エノシュを後継者とし、アダムの身体を守ること、神を畏れること、また、民に神を敬い、敬虔な行いをするように命じるよう、彼に指示したのであった。その後、アープ月27日火曜日の日中第3刻 *thalāth sā'āt min al-nahār* にシェトは死んだ。彼の生涯は912年であった。

[6] シェトの子エノシュ

シェトが没した後、シェトとアダムの遺言を守ったのは、シェトの子エノシュであった。彼はよく神を崇拜し、彼の民に神を敬うように命じていた。ところで、呪われしカインが殺されたのは、

⁵⁶ 両写本にはこの部分は存在していないにもかかわらず (M: 1b; C: 2a)、刊本や英訳 (E: 264) では断りなく補われている。

⁵⁷ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *wa akhnūkh wa nisā'* の文句が破損のため読めず (C: 2a)、刊本では角括弧で推測された文句が補われている。当該箇所はマンチェスター写本には、*wa akhnūkh wa nisā'* とあり (M: 1b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。

彼の時代であった。盲目のレメク Lamak がカインに石を投げ、彼の頭を砕いたのである。かくしてカインは死んだ。90歳になった後、エノシュにはケナンが生まれた。死がエノシュに訪れた時、彼の息子たちとその子孫、すなわち、ケナン、マハラルエル、イエレド、エノク、メトシエラハ Mattūshalakh、そして、彼らの妻や子どもたちが彼のもとに集まった。エノシュは彼らのために祈り、神の祝福を祈願した。そして、彼らが聖なる山から下りること、また、彼らの子孫に属する者に呪われしカインの一族と関係を持つように呼びかけることを禁じた。そしてケナンを、アダムの身体についての後継者とし、彼らにケナンのもとで礼拝を行い、神を大いに崇拝するように命じた。彼はティシュリーン・アルアウワル月3日の日没時に死んだ。彼の生涯は965年であった。

エノシュの子ケナン

エノシュの子ケナンが指導者となった。ケナンは温和で、敬虔で、神を畏れる男 muqaddis だった。彼は彼の民とともに神に従い、良く崇拝し、アダムとシェトの遺言を遵守した。70歳になった後、彼にマハラルエルが生まれた。彼の死の時がやって来た時、彼の息子たちとその子孫、すなわち、マハラルエル、イエレド、メトシエラハ、レメク Lamak、そして、彼らの妻や子どもたちが彼のもとに集まった。ケナンは彼らのために祈り、神の祝福を祈願した。その上で、誰一人としてこの聖なる山から下りて呪われしカインの一族のもとに行かないことを、アベルの血にかけて彼らに誓わせた。そしてマハラルエルを後継者とし、アダムの身体を守るように彼に命じ、ケナンは死んだ。彼の生涯は920年だった。

[7]ケナンの子マハラルエル

そしてケナンの後に指導者になったのはケナンの子マハラルエルであった。マハラルエルは、彼の民とともに神に従い、ケナンの遺言を遵守した。65歳になった後、彼にイエレドが生まれた。死がマハラルエルに訪れた時、息子イエレドを後継者とし、彼にアダムの身体についてのことを任せた。その後マハラルエルは、ニーサーン月2日日曜日の日中第3刻に死んだ。彼の生涯は895年だった。

マハラルエルの子イエレド

そしてマハラルエルの後に指導者になったのはイエレドであった。イエレドは、神を信仰する男で、神への行いと神に対する崇拝が完璧で、昼夜を問わず多くの礼拝を行う者であった。故に神は、彼の寿命を長くしたのである。62歳になった後、彼にエノクが生まれた。ところで、第1千年紀が終わった時、イエレドは40歳だった。イエレドの生涯のうち500年の時が過ぎた時、シェトの一族は、彼らの間に存在していた契約と協定を破った。遂に彼らは、カインの一族が住まう地に下り始めたのであった。彼らとその地に下りた契機は次の通りだった。悪魔 shaytān が人間たちの中か

ら二人の悪魔の如き者 *shaytānayn min al-uns* を手中に収めた。その一人の名はユバル *Yūbal*⁵⁸ と言
い、もう一人の名はトバル・カイン *Tūbal-qayn*⁵⁹ と言った⁶⁰。悪魔はこの二人に対してあらゆる歌と
笛を教え込んだ。すると、ユバルは横笛、マンドリン、リュート、笛 *ṣafir*⁶¹ を発明し、トバル・カ
インは太鼓、タンバリン、シンバルを発明したのである。さて、カインの一族には、悪魔がいなかつ
たならば *illā amāma al-shaytān*、彼らを夢中にさせる行いや語りはなかった。そして彼らは、禁止
された罪深き行為に手を染め、犯罪に手を染めることに合意したのであった⁶²。そして、それに関
しては、若者よりも年老いた男女の方が激しかった。かくして彼らは[8]集まり、横笛を吹き、太
鼓、タンバリン、リュート、シンバルを打ち鳴らし、大声を出し笑っていた。すると、山に住むシェ
トの一族は彼らの声を聞いた。そのうち100人の男が山を下ってカインの一族のもとに行き、その
音の正体を確認することで合意した。その一件がイエレドの耳に入ると、イエレドは彼らのもとに
行き、彼らのために神に懇願した。そして、彼らの父祖の遺言を思い出させ、アベルの血にかけて
誓わせたのである⁶³。その中からイエレドの息子エノクが立ち上がり、言った。「知るがよい、お前
たちの中で我らの父イエレドに齒向かい、我らの父祖との契約を破り、我らの山から下りし者に対
しては、我らは未来永劫、山に登る許しを与えはしないことを」と。しかし彼らは、山を下りる以
外の選択肢を拒んだ。そして山を下りると、醜行に手を染めた後に、カインの一族の女性たちと交
わったのである。イエレドに死が訪れた時、彼の息子たちとその子孫、すなわち、エノク、メトシェ
ラハ、レメク、ノア *Nūh* が彼のもとに集まった。イエレドは彼らのために祈り、神の祝福を祈願
した。そして、彼らが聖なる山から下りることを禁じた。しかし彼は「お前たちは下の大地へとど
うしても下りざるを得なくなるだろう。その時に、お前たちのうちで最後に⁶⁴山を下りる者は我ら
の父アダムを伴って下り、それを大地の中央に安置してもらいたい。アダムが我らに言い遣
した⁶⁵ように」と言った。そして息子エノクに対して、宝の洞窟の中で祈り続けるように命じた。
その後、アザール月1日金曜日の日没時にイエレドは死んだ。彼の生涯は962年だった。

⁵⁸ 両写本では *Yūnik* となっているが (M: 2a; C: 2b)、ここでは刊本に従った。これ以降の名前も同様。

⁵⁹ マンチェスター写本では *Yūnal-qayn* に、ケンブリッジ写本では *Yūtal-qayn* となっているが (M: 2a; C: 2b)、こ
こでは刊本に従った。これ以降の名前も同様。

⁶⁰ 『旧約聖書』『創世記』4章19-22節に登場するカインの5代目の子孫レメクの二人の息子のこと。ここでは、
ユバルはレメクとアダの子で、竖琴と笛を奏する者全ての父祖とされ、一方のトバル・カインはレメクとツイ
ラの子で、青銅と鉄を扱う全ての者の父祖とされている。ただし、『宝の洞窟』では、二人は盲目のラメクの
息子とされている (*Die Schatzhöhle*, p. 58)。

⁶¹ 刊本で底本とされたケンブリッジ写本には「صعتر」^{صعتر}と文字の識別点が打たれておらず、校訂者はこれを「صور」^{صور}
と読んだ。一方で、マンチェスター写本にははっきりと「صفير」^{صفير}と識別点が打たれており、意味も妥当であ
ることからマンチェスター写本の表記を採用した (M: 2a; C: 2b)。

⁶² マンチェスター写本では *tajtami'ūna* となっているが (M: 2a)、ここでは刊本に従い *yajtami'ūna* と読んだ。

⁶³ マンチェスター写本では *jalafa* (?) となっているが (M: 2a)、ここでは刊本に従い *hallafa* と読んだ。

⁶⁴ 刊本では *ākhir* となっているが、両写本には *ākhiran* とある (M: 2a; C: 3a)。ここでは写本に従った。

⁶⁵ 刊本では *awsā* となっているが、両写本には *waṣṣā* とある (M: 2a; C: 3a)。ここでは写本に従った。

イエレドの子エノク

そしてイエレドの後に指導者になったのはイエレドの子エノクであった。イエレドは神を良く崇拜していた。65歳になった後、彼にはメトシェラハが生まれていた。シェトの一族、彼らの妻や子どもたちは山を下り始め、それによりエノクは苦しんだ。彼は、一族の者、すなわち、メトシェラハ、レメク、ノアを呼び、「私は知っている。神はこの民ummaを、慈悲など一切ない大きな責め苦で苛むであろうことを」と言った。ところで、エノクは[9]ペンで文字を書いた最初の人物である。また、預言者イドリース Idris⁶⁶その人のことである。エノクは息子たちに対して、神を厳かに崇拜し、誠実に確実な行いをするように言い遺した。その後、300歳になった時、神は彼を天に召した。

エノクの子メトシェラハ

そしてエノクの子メトシェラハが神を良く崇拜し⁶⁷服従した。187歳になった後、彼にはレメクが生まれていた。その後、神はメトシェラハの時代にノアに啓示を下したのである。神はノアに、神が人々に対して洪水を起こすであろうことを知らせ、木で箱船を造るように命じた。ノアが344歳になった時、第2千年紀が終わった。メトシェラハはアイルール月21日木曜日に死んだ。彼の生涯は960年だった。

メトシェラハの子レメク

そしてレメクが、父[メトシェラハ]の後に神を良く崇拜し服従した。レメクが182⁶⁸歳になった後、彼には子どもが生まれていた。彼の時代には、巨人jabābiraの数が増えるようになった。というのも、シェトの一族がカインの血を引く女性たちと交わった時、彼らから生まれたのは巨人ばかりだったからである。その後、死の時が近づくと、レメクは、ノア、セム Sām、ハム Hām、ヤベテ Yāfīth、そして彼らの妻たちを呼んだ。その時には、シェトの一族のうちで、カインの一族の所に下りて行くことなく山に残っていたのは、彼らだけだった。その数は8人で、洪水以前に子を儲けた者はいなかった⁶⁹。そこでレメクは、彼らのために祈り神の祝福を祈願した。その後涙を流し、彼らに対して言った。「これらの8人を除き一人も我が一族に属する者は残っていない。私は、アダムとエバの二人だけを作り出し、後に二人の子孫を増やした神に^{こいねが}希います。神が、悪しき民

⁶⁶ 『クルアーン』に登場する預言者 (Q 19: 56-57, 21: 85-86)。イドリースは、イスラームの伝承の中で『旧約聖書』に登場するエノクの他にも、古代における伝説上の賢者ヘルメス・トリスメギストと同一視されることで知られている。アラビア語で「学ぶこと」を意味するその語根の派生語として解釈できるためか、文字や天文学など、古代にまで遡る知識を創出した人物とも伝えられる。G. Vajda, “IDRĪS,” *EI*²; K. Th. van Bladel, *The Arabic Hermes: From Pagan Sage to Prophet of Science*, Oxford: Oxford University Press, 2009.

⁶⁷ 刊本では bi-‘ibādat Allāh となっているが、両写本は li-‘ibādat Allāh とある (M: 2a; C: 3a)。ここでは写本に従った。

⁶⁸ 刊本では ithnatāni となっているが、両写本には ithnāni とある (M: 2a; C: 3a)。

⁶⁹ ノア、セム、ハム、ヤベテとその妻1人ずつで、合計8人と解釈した。

al-umma al-sū'のために用意したこの罰からお前たちを救い出し、[10]地を満たすほどにお前たちの子孫を増やすこと、我らの父アダムの祝福をお前たちに与えること、そして、お前たちの子孫に王権を授けることを。私は死に行く者だ。罰を受ける人々 ahl al-rujzの中で、ノアよ、お前以外に助かる者はいないだろう。故に、私が死んだ暁には、私を運び出して、宝の洞窟の中に安置しなさい。そして、お前が箱船に乗ることを神が望んだ暁には、我らの父アダムの身体を運び出し、それを伴って下りなさい。そして、箱船の上層の船室の中央に安置しなさい。さらに、お前とお前の息子たちは箱船の東側に、お前の妻と息子の妻たちは箱船の西側に居るようにし、アダムの身体がお前たちの間にあるようにしなさい。そして、お前たちは妻たちのもとに行ってはならないし、妻たちもお前たちのもとに行ってはならない。彼女たちと飲食をともにしてはならないし、彼女たちに近付いてもならない。お前たちが箱船から出るまでは（そのようにしなさい）。そして、洪水が引き、箱船から地に出た暁には、アダムの身体の側で祈り、それから、お前の長男セムを後継者としなさい。彼に、アダムの身体を運び出させ、大地の中央に安置させ⁷⁰、彼の息子の一人にそれを守らせなさい。彼の息子を、生涯神のために尽くす祭司 *ḥabr* とし、妻と結婚させず、家を建てさせず、血を流させず、獣であっても鳥であっても犠牲を捧げさせないように。そうすれば、神は天使たちの中からある天使を遣わすだろう。そして、その天使は彼を大地の中央へと導き、彼と共にいることだろう」と。レメクはアザール月17日日曜日の日中第9刻に死んだ。彼の生涯は777年だった。

ノア

神は、ノアの父祖であり、預言者イドリースに相当するエノクの時代に、ノアに啓示を授けた。ところで、神がイドリースを [高い地位] に上げた⁷¹とも言われている⁷²。神は、ノアに対して、彼の民に警告し、彼らが犯していた罪を禁じ、彼らに神の罰を警告するように命じたのであった。するとノアは、神を崇拝し、彼の民のために祈願するようになった。彼は神[11]を崇拝し民のために祈願することに全身全霊を捧げ、500年間妻を持たなかったのである。その後、神は彼に、エノクの子ナームーサー *Nāmūsā* の娘ハイカル *Haykal* を妻とするように啓示を授けた。そして、神が地に洪水を起こすであろうことを知らせ、ノアとその家族を救うために箱船を作るように命じた。さらに、箱船に下層、中層、上層の三つの船室を設けるように命じた。また、箱船の長さを、ノアの腕の長さを1ズイラーウとして計算して、300ズイラーウに、幅を50ズイラーウに、高さを30ズイラーウにするように⁷³、木製の棚を船内の仕切りとするように、下層の船室は駄獣、野獣、猛獣用に、

⁷⁰ ケンブリッジ写本では *li-yaj'al* が *li-taj'al* となっている (C: 3b)。

⁷¹ この件は、『クルアーン』にある「そして、われらは彼を高い地位に上げた」(Q 19: 57)を受けてのものだと考えられる。

⁷² 刊本では、*qabla an* となっているが、両写本では *qīla inna* となっており (M: 2b; C: 3b)、ここでは写本に従った。なお、英訳では刊本の読みが採用されている (E: 268)。

⁷³ ズイラーウはアラビア語で一般に腕尺を表す単位である。箱船の大きさについては、『旧約聖書』「創世記」6章15節の記述と一致しており、そこでは、「アンマ」という単位が用いられている。

中層の船室は鳥用に、上層の船室はノアとその家族用にするように、上層には水瓶と食糧置き場を設けるようにと命じたのであった。ところで、彼に子が生まれたのは500歳になった後のことだった。

ノアは箱船を作り終えたが、その際に、カインの一族、およびシェトの一族の中で彼らと交わった者たちは、ノアが箱船⁷⁴を作る様を見て、彼のことを嘲笑った。そして、ノアが箱船を作り終えると、彼らに箱船に乗るように呼びかけ、神が地の全てに洪水を起こし、罪を犯した人々から地を清浄にするであろうことを知らしめたのであった。しかし、彼らのうちの誰一人として彼に応じなかった。そこで、ノアとその一族は宝の洞窟に登り、アダムの身体を運び出した。そして、アザール月17日金曜日に箱船の上層の船室の中央に安置した。その上で、鳥を中層の船室に、駄獣と猛獣を下層の船室に収容した。そして、太陽が沈んだ時に、箱船の扉を閉じたのであった⁷⁵。

神は天より水を放ち、大地に泉を湧き出させた。《そこで、(天と地の)水は、すでに定められた事(洪水による民の溺死)の上に落ち合った(合流した)》⁷⁶。水は全ての大地と山を飲み込んだ。そして世界は暗闇に包まれ、太陽と月の光は無くなり、その結果、昼と夜が同じになった。算術家 *aṣḥāb al-hisāb*⁷⁷ の説に従えば⁷⁸、神が水を放つまさにその時に上昇点⁷⁹にあったのは巨蟹宮であり、一方で、太陽、月、土星、水星、昇交点⁸⁰は[12]双魚宮の最後の分の位置にともにあったという。40日にわたり水は天地から溢れ続け、その結果、あらゆる山の上15ズイラーウ⁸¹の高さに至るまで上昇したのである。それから、大地の中で水が満たし覆い尽くしていない所がなくなった後、水は止まった。箱船は地の全てを巡り、メッカに至るまで航行し、1週間、神殿 *al-bayt* の周りを廻っていた。それから5ヶ月経つと水は退いた。それが始まったのは、アイヤール月⁸²17日で、ティシュリーン・アルアウル月13日まで続いた。ノアはラジャブ月1日に箱船に乗り、ムハッラム月に《ジューディー⁸³の上に乗り上げた》⁸⁴、故に、その月は諸月の最初として数えられるようになったの

⁷⁴ これ以前には、箱船を示す名詞として *safīna* が使用されていたが、ここでは、*fulk* が使用されている。

⁷⁵ 『旧約聖書』「創世記」7章16節には、「こうして、ヤハウエは彼の後ろ [の出入口] を閉じた」とある。

⁷⁶ Q 54: 12。

⁷⁷ 英訳では占星術師 *astrologer* と訳されており (E: 269)、天文学者のようなものを指しているものと考えられる。

⁷⁸ 刊本では *taqūlu* としているが、マンチェスター写本では *yaqūlu* となっており (M :2b)、ケンブリッジ写本では弁別点が振られていない (C: 3b)。ここでは、マンチェスター写本に従った。

⁷⁹ ビールーニー著『占星術教程の書』では、「これは東の地平線に現れる黄道帯であり、その宮が上昇点 (アセンダント) の宮であり、その度が上昇点の度である。それは任意の時のものである」(山本啓二、矢野道雄訳「アブー・ライハーン・ムハンマド・イブン・アフマド・アル=ビールーニー著『占星術教程の書』(2)」318頁)と説明されている。

⁸⁰ 天球上の交点のうち、天体が黄道の内側から北側に通過する点。

⁸¹ 水位については、『旧約聖書』「創世記」7章20節の記述と一致している。

⁸² 刊本では *ādhār* となっているが、両写本には *ayyār* (M: 3a; C: 4a) とある。ここでは両写本に従った。英訳でも *ayyār* という読みが採用されている (E: 270)。

⁸³ 山の名前。『旧約聖書』「創世記」8章4節では、箱船が流れ着いたのは現在のトルコとアルメニアにまたがるアラト山だとされるが、『クルアーン』ではジューディー山だとされる。この山はジャズィーラ・イブン・ウマルの北東約40kmの地点に位置する (M. Streck, "DJÜDĪ," *EI*²)。

⁸⁴ Q 11: 44。

だ⁸⁵、と伝える者もいる。しかし、啓典の民はこれには異を唱えている。

モスル Mawṣil の地に位置する山である《*ジューディーの上に乗り上げた*》⁸⁶時、神は天からの水に対して命じると、水はもとあった場所へと戻った。また、神が地に命じると、地はその水を飲み込んだのである。その後、箱船が止まってから、ノアは4ヶ月間（船内に）留まった。それから彼は、水に関する情報を手に入れるために烏 ghurāb⁸⁷を放ったが、烏は、死骸が水の上を漂っているのを見つけると、その上に止まり、戻ることはなかった。それから彼は、鳩を放ったが、鳩はオリブの若葉を携えて戻ってきた。かくしてノアは、既に水が退いたことを悟り、アイヤール月27日、外に降り立った。彼が箱船に乗ってから外に降り立つまでに、実に1年と10日の歳月が流れていた。彼とその一族は大地に降り立つと、町を作り、それを「サマーニーン Thamānīn」⁸⁸と名付けた。ノアは箱船から外に降り立ち、人々の骨が転がっているのを見ると、それにより、心を痛めて悲しんだ。その彼に対して神は、「以後、決して地に洪水をもたらすようなことはしない」という啓示を授けた。ノアは外に降り立つと、錠で箱船を封印し、息子セムにその鍵を手渡した。その後ノアは、種を蒔き、葡萄を育て、地を豊かにしたのである。

ある日ノアは眠っていたが、彼の服が^{はだ}開けてしまっていた。その時、息子ハムは彼の陰部を見て、笑った。一方で、ハムの兄弟であるセムとヤベテはそれを聞くと、服を手に取り、[13]ノアのもとに持って来た。その際に、彼らは顔をノアから背けていた。そして、ノアに服をかけたのであった。ノアは眠りから覚め、事の次第を知ると、ハムの子カナン Kana'an を呪った。一方で、ハムを呪うことはなかった。ハムの一族には、キプト Qibt、ハバシヤ Habasha、ヒンド Hind がいた。カナンは、ノアの一族の中でカインの末裔の所業に立ち戻った最初の男だった。娯楽に興じ、歌を歌い、横笛を奏で、太鼓、リュート、シンバルを鳴らした。彼は、娯楽や虚栄という点で悪魔に忠誠を誓ったのである。

ノアは大地を息子たちに分け与えた。セムには大地の中央、聖域とその周辺地域、さらには、ヤマン Yaman からハドラマウト Ḥadramawt、そこからウマーン 'Umān、そこからバフライン

⁸⁵ 刊本では *yu'addu-hu* となっているが、マンチェスター写本では代名詞が落ちている (M: 3a)。一方で、ケンブリッジ写本ではこの代名詞は後で補われているように見える (C: 4a)。

⁸⁶ Q 11: 44。

⁸⁷ 英訳では烏 crow と訳すべきかわたりガラス raven と訳すべきか考察されており、わたりガラスと訳されている (E: 270)。ただし、ここでは『旧約聖書』「創世記」8章7節の日本語訳に基づき烏と訳出した。内容は少し異なるが、ノアが烏と鳩を放った話については、『旧約聖書』「創世記」8章6-11節にある。

⁸⁸ 『宝の洞窟』においては、箱舟から降り立ったのがノアと3人の息子と彼らの妻たち4人で8人であり、シリア語の「8」に由来する地名であることが補足的に記されている (*Die Schatzhöhle*, p. 102)。

しかし、「サマーニーン」はアラビア語で80という意味となるため、例えばマスウーディー著『黄金の牧場』などには、ノアの家族以外に80人の人が箱船に乗船していたという記述があり (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 43)、その数に因んだ地名だとされる。ただし、この人数については、タバリー著『諸預言者と諸王の歴史』に、諸説が列挙されており、80人説以外の伝承も存在していたことがヤアクービー以外のアラビア語の歴史叙述からも確認できる (Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E.J. Brill, 1879-1901, serie 1, pp. 194-197)。

Bahrayn、そこからアーリジュ ‘Ālij⁸⁹、ヤブリーン Yabrīn⁹⁰、ワバール Wabār⁹¹、ダウウ Daww⁹²、ダフナー Dahnā⁹³に至る地を与えた。一方で、ハムには西方の地および沿岸地域 arḍ al-Maghrib wa al-Sawāhil⁹⁴を与えた。ハムには、クシュ Kūsh b. Hām、カナン Kana‘ān b. Hām、ヌーバ Nūba、ザンジュ Zanj、ハバシヤ Habasha が生まれた。ノアの子ヤペテは、東方と西方の間の地域におさまった。彼には、ゴメル Jūmar⁹⁵、トバル Tūbal⁹⁶、マダイ Māsh、メシエク Māshaj、マゴグ Mājūj が生まれた⁹⁷。そして、ゴメルにはサカーリバ Ṣaqāliba、トバルにはブルジャーニ Burjān、マダイにはトゥルク Turk とハザル Khazar⁹⁸、メシエクにはアシュバーン Ashbān、マゴグにはゴグ Yājūj とマゴグ Mājūj が生まれたのである。彼らは、トゥルク Turk の地の東の地域に住んだ。また、サカーリバとブルジャーニは、ルーム人 Rūm が住まう以前、ルーム⁹⁹の地に住んでいた。これらが、ヤペテの一族である¹⁰⁰。

ノアは箱船から外に降り立った後、360¹⁰¹年間生きた。死がノアに訪れた時、彼の3人の息子セム、ハム、ヤペテ、そして、彼らの一族がノアのもとに集まった。ノアは、神を崇拝するように彼らに遺言をし、命じた。さらに、ノアはセムに命じた。「私が死んだ暁には、箱船に入ること。その行為を誰にも悟られないようにすること。アダムの身体を運び出すこと。アダムの身体を運ぶ際には、[14]セムの子レメク Lamakの子メルキツェデク Malkayzadaq を伴うこと。まことに、神が彼を選び、地の中央の聖なる場所においてアダムの身体とともにある者としたのだ」と。ノアは続けてセムに言った。「セムよ、お前とメルキツェデクが出立する暁には、神が天使たちの中からある天使を遣わし、お前たちをその道へと導き、大地の中央を指し示すだろう。その際には、お前の行いを誰にも知らせてはならない。この行為はアダムの遺言そのものであり、アダムが彼の子孫に遺言し、その後、代々遺言を重ね、最後にお前に伝わったものなのだ。そして、天使がお前たちに指

⁸⁹ アラビア半島中央部の巡礼路近くに広がる砂漠地域 (Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, 5 vols., Beirut: Dār Ṣādir, 2015, vol. 4, pp. 69–70)。

⁹⁰ アラビア半島東部に広がる砂漠の地域で、バフライン地方に属している (G. R. Smith, “AL-YABRĪN,” *EI*²)。

⁹¹ アラビア半島の伝説上の町で、アード、サムード、ジャディース、タスマの民としばしば関連付けられる (J. Tkatsch, “AL-WABĀR,” *EI*²)。

⁹² メッカとバスラの間にある地域 (Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 2, p. 490)。

⁹³ ヤマーマ地方とバフライン地方を分ける砂漠地域 (C. D. Matthews, “AL-DAHĀNĀ,” *EI*²)。

⁹⁴ 英訳では、後者が北アフリカおよび東アフリカ沿岸地域を指すとされている (E: 271, n. 34)。

⁹⁵ マンチェスター写本では Jurmaz に、ケンブリッジ写本では Jurmar になっているが (M: 3a; C: 4a)、ここでは刊本に従った。これ以降の名前も同様。

⁹⁶ 両写本では Shūbal となっているが (M: 3a; C: 4a)、ここでは刊本に従った。これ以降の名前も同様。

⁹⁷ ヤペテの子どもの名前については、ほぼ『旧約聖書』「創世記」10章2節に対応している。

⁹⁸ 両写本では Jazar となっているが (M: 3a; C: 4a)、ここでは刊本に従った。

⁹⁹ 地域名としてはアナトリア半島を意味する言葉 (太田敬子「ルーム」『新イスラム事典』)。

¹⁰⁰ 以上に見られる名前の中には、『旧約聖書』に見られるノアの子孫たちの名前と、地名から採られた名前が混在している。イスラーム世界の都市や地域、民族等の名の起源として、こうした系譜が用いられることは少なくない。

¹⁰¹ 両写本では sittūn となっているが (M: 3a; C: 4a)、ここでは刊本に従った。

し示した場所に到着した暁には、そこにアダムの身体を安置しなさい。その上で、メルキツェデクにアダムの身体から離れないように、そして、神への崇拜以外のことを行なわないように命じなさい¹⁰²。さらに、結婚をしないように、家を建てないように、血を流さないように、野獣の皮から作った服以外を着ないように、髪や爪を切らないように、一人で座るように、そして、大いに神を称賛するように命じなさい¹⁰³と。その後、ノアはアイヤール月の水曜日に死んだ。彼の生涯は、まさに神が《1,000年に50年欠ける間》¹⁰⁴と言っている通りに、950年であった。

ノアの子セム

そしてノアの子セムが、父〔ノア〕の後に神を良く崇拜し服従した。セムが102歳¹⁰⁵になった後、彼にはアルバクシャド Arfakhshad が生まれていた。その後、セムは出発し、箱船の扉を開いた¹⁰⁶。そして、アダムの身体を持ち出し、兄弟 ikhwa¹⁰⁷や家族には内密に、アダムの身体を伴って地上に降り立った。彼は二人の兄弟ヤペテとハムを呼び、言った。「父は私に遺言し命じた。海に行き、地を検分し、そして戻るように、と。故に、私がお前たちのもとに戻る前に動いてはならない。そして、私の妻と子どもの面倒をよく見るように」と。ヤペテとハムはセムに対して言った。「神のご加護のもとに行ってください。既にご存知のように、大地は荒廃しています。我々は、貴方が猛獣に襲われることを危惧しています」と。セムは言った。[15]「神が天使たちのうちのある天使を遣わしてくれるだろう。故に、私は何も恐れてはいないのである。神が御望みになるならば」と。そしてセムは、息子のレメク Lamak¹⁰⁸を呼び、彼とその妻ヤーワズダク Yāwazdaq¹⁰⁹に対して言った。「お前たちの息子メルキツェデクを私とともに派遣しなさい。道中、彼が私と共に居るように」と。二人はメルキツェデクに対して「お行きなさい、正しく導かれし者として」と告げた。その後、セムは二人の兄弟、家族、一族の者に対して言った。「既にお前たちも知っているように、我らの父ノアは私に遺言して命じたのである。箱船の扉を閉じるように、そして、私もそれ以外の何人たりともその中に立ち入らないように、と。故に、お前たちのうち誰一人として箱船には近づいてはならない」と。その後、セムは出立したが、その時にはメルキツェデク¹¹⁰が彼に同行した。すると、天使が彼らのもとに現れ、彼らの伴をし続け、最後には彼らと一緒に、アダムの身体を安置するように命じられていたその場所へと辿り着いたのである。その場所は、一説では、ミナー・

¹⁰² 両写本では amara となっているが (M: 3a; C: 4b)、ここでは刊本に従った。

¹⁰³ amara となっているが、文意から命令形で解釈した。

¹⁰⁴ Q 29: 14。

¹⁰⁵ 両写本には sana はなく (M: 3b; C: 4b)、刊本ではこれが補われている。ここでは刊本に従った。

¹⁰⁶ 刊本では wa-fataḥa となっているが、両写本では fa-fataḥa となっており (M: 3a; C: 4b)、ここでは写本に従った。

¹⁰⁷ 両写本では、ikhwa となっているが (M: 3b; C: 4b)、刊本では akhway と直されている。ここでは写本に従った。

¹⁰⁸ 両写本では、MLKYA となっているが (M: 3b; C: 4b)、ここでは刊本に従った。

¹⁰⁹ 刊本では壊れた形であると見なされている。英訳では、ヨゼデクであると解釈されており (E: 271)、これは『宝の洞窟』におけるレメクの妻の名を採ったものである (Die Schatzhöhle, pp. 116-117)。

¹¹⁰ ibn-hu とあるが、孫のメルキツェデクだと解釈した。

モスク masjid Minā¹¹¹のミナレットの側^{そば}だと言われている。一方で、啓典の民は、その場所は聖なる地に属するシリア Sha'm の地であると主張している¹¹²。地が開き、彼らはその中にアダムの身体を安置した。その後、その上で地が閉ざされたのである。そして、セムは、セムの子レメクの子メルキツェデクに言った。「ここに座し、神を良く崇拝しなさい。そうすれば、神は、毎日、お前に天使たちのうちのある天使を遣わし、お前と共に居させるであろう」と。それから、セムは彼に挨拶をして立ち去り、家族のもとへと戻った。すると、息子レメクがメルキツェデクのことについて彼に尋ねてきた。セムは「メルキツェデクは道中で死んでしまい、私が葬った」と答えた。すると、メルキツェデクの両親は彼を思って悲しんだ。その後、死がセムに訪れると、彼は息子アルパクシャド Arfakhshad¹¹³を後継者とした。セムはアイルール月7日木曜日に死んだ。彼の生涯は600年だった。

セムの子アルパクシャド

そして、セムの子アルパクシャドが神¹¹⁴を崇拝し服従した。アルパクシャドが185歳になった後、彼にはシェラハ Shālih が生まれていた。既にノアの一族は諸国に散らばっており、その中から、巨人や暴虐な者の数が増えていた。[16]ノアの一族を墮落させたのは、ハムの子カナンであった。彼らは罪深き行為に手を染めるようになっていた。アルパクシャドに死が訪れた時、彼の息子たちと家族が彼のもとにやって来た。するとアルパクシャドは彼らに対して、神を崇拝し、罪深き行為を慎むように遺言した。そして、息子シェラハに対して、「私の遺言を受け入れなさい。そして、私亡き後は、お前の一族を率いて神を崇拝しなさい」と言った。アルパクシャドはニーサーン月23日日曜日に死んだ。彼の生涯は465年だった。

アルパクシャドの子シェラハ

そして、アルパクシャドの子シェラハが、彼の民の指導者となった。彼は彼らに対し神に従うように命じ、神に背く行為を禁じた。そして、罪深き人々にもたらされる懲罰や処罰について警告した。シェラハが130歳になった後、彼にはエベル 'Ābir が生まれていた。その後、死がシェラハに訪れると、彼はシェラハの子エベルを後継者とし、呪われしカインの一族の所業を避けるように命じた。シェラハはアザール月13日月曜日に死んだ。彼の生涯は430年だった。

¹¹¹ ミナーは、メッカの聖モスクから東へ約5km離れた、岩山に囲まれた細長い谷間である（「森伸生『ミナーの谷』『岩波イスラーム辞典』」）。

¹¹² 『宝の洞窟』ではメルキツェデクがアダムの遺体を安置したのは「ゴルゴダ Gagūltā の丘」であるとされている（*Die Schatzhöhle*, p. 114）。

¹¹³ 両写本では Arfashhad となっているが（M: 3b; C: 4b）、ここでは刊本に従った。

¹¹⁴ 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では ta'ālā としかなく（C: 4b）、刊本では [Allāh] ta'ālā と角括弧で Allāh という文句が補われている。一方、マンチェスター写本には、Allāh の文句があるため（M: 3b）、ここではマンチェスター写本に従った。

シェラハの子エベル

そして、シェラハの子エベルが指導者となり、彼の民に神に従うように呼びかけた¹¹⁵。また、ノアの子セム一族に対し、ハムの子カナン末裔と交わることのないようにと警告した。カナンは父祖の信仰を変質させ、罪深き行為を犯した者であった。エベルが134歳になった後、彼にはペレグ Fālagh が生まれていた。その後、死がエベルを訪れると、彼は息子ペレグを後継者とし、彼に対して言った。「息子よ。呪われしカイン一族が神に対する罪深き行為を数多く為し、シェト一族が彼らに加わった時には、神は彼らに対して懲罰を与えた。故に、お前もお前の民もカナン一族の共同体 *milla* に加わってはならない」と。エベルはティシュリーン・アルアウワル月23日木曜日に死んだ。[17]彼の生涯は340年だった。164年だったとも言われている。

エベルの子ペレグ

そして、エベルの子ペレグが、エベルの後に指導者となり、民に神に従うように呼びかけた¹¹⁶。彼の時代に、ノア一族がバビロン Bābil に集まった。それは次の通りであった。ノアの子セムの子アラム Aram の子マシュ Māsh がバビロンの地に入り、そこで、巨人ニムロド Nimrūd とナビート Nabīṭ を儲けた。ナビートはナバテア人¹¹⁷の祖にあたり、水路を引き¹¹⁸、木を植え、土地を耕した最初の者であった。彼らの言葉は一様に、アダム言葉であるシリア語 Suryānī であった。彼らはバビロンに集まった時、互いに「その基層が大地に接しており、その頂点が天に届くような建物を建てようではないか」と言った。建物の建築に取り掛かると、彼らは「それを洪水から我らを守る砦にしよう¹¹⁹」と言った。すると神は、彼らの砦を破壊し、言葉を72に分けてしまった。彼らはその住まう場所に依じて、72の集団に分かれたのである。セム一族には19の言葉、ハム一族には16の言葉、ヤベテ一族には37の言葉があった¹²⁰。彼らは、自分たちが陥った状況を目の当たりにすると、エベルの子ペレグのもとに集まった。彼は彼らに「お前たちの言語が分かれてしまった故に、お前たちは一つの地には居られない」と言った。彼らは「我らの間で地を分割してください¹²¹」と応じた。そして、ペレグは彼らの間で大地を分けたのであった。スィーン Šīn (中国)、ヒンド Hind、スィンド Sind、トゥルク Turk、ハザル Khazar、トゥツバト Tubbat (チベット)、ブルガル

¹¹⁵ 両写本では *يدعوا* となっているが (M: 3b; C: 5a)、ここでは刊本に従った。

¹¹⁶ 両写本では *يدعوا* となっているが (M: 3b; C: 5a)、ここでは刊本に従った。

¹¹⁷ ヘレニズム時代、ローマ時代にアラビア半島北西端で交易などを活発に行ったアラブ系住民 (小川英雄・春田晴郎「ナバテア人」『古代オリエント事典』日本オリエント学会編、岩波書店、2004年)。

¹¹⁸ *istanbata* という Nabīṭ と同じ語根の動詞が用いられている。

¹¹⁹ マンチェスター写本では *nattakhidhu* に、ケンブリッジ写本では *nattakhidhū* となっているが (M: 4a; C: 5a)、刊本では、*nattakhidhu-hu* と直されている。ここでは刊本に従った。

¹²⁰ マスウーディー著『黄金の牧場』では、それぞれ、19、17、36となっている (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 46)。

¹²¹ ケンブリッジ写本では IQSTMWA となっており (C: 5a)、これが刊本では *iqsimū* と翻刻されているが、ここではマンチェスター写本の *iqsim* という読みを採用した (M: 4a)。

Bulghar、ダイラム Daylam、ホラーサーン Khurāsān の地の周辺地域はノアの子ヤベテの末裔のものとなった。この時にヤベテの一族の王であったのは、ジャムシード Jam Shād¹²² だった。また、西方の地、およびユーフラテス河 Furāt の向こうの地域¹²³ から日の沈む土地まではハムの末裔のものに、そして、ヒジャーズ Hijāz、ヤマン、および残りの土地はセムの一族のものとなった。ペレグが30歳になった後、彼にはレウ Irgū¹²⁴ が生まれていた。死がペレグに訪れた時、彼は息子レウを後継者とした。ペレグは[18]アイルール月12日金曜日に死んだ。彼の生涯は239年だった。

ペレグの子レウ

そして、ペレグの子レウが父（ペレグ）の後に指導者となった。既にその時には、言葉は72の集団ごとに分かれていたのである。セムの一族には19の集団、ハムの末裔には16の集団、ヤベテの末裔には37の集団がいた。彼の時代には、巨人ニムロドが活躍し、拠点をバビロンに構えていた。彼こそが宮殿の建設を始めた者であり、最初に王冠を作った者である。ニムロドの治世は67年だった。レウが32歳になった後、彼にはセルグ Sārūgh が生まれていた。レウが74歳になった時、第3千年紀が終わった。死がレウに訪れると、彼は息子セルグを後継者とした。レウ¹²⁵ はニーサーン月14日水曜日に死んだ。彼の生涯は200年だった。

レウの子セルグ

そして、レウの子セルグが、父[レウ]の死後にセムの末裔の指導者となった。既にその時には、巨人たちの数はいや増し、大地で暴虐の限りを尽くしていた。セルグの時代に、偶像崇拜が始まった。偶像にまつわる事柄の始まりは次の通りであった。人が亡くなった際に、大切な父、兄、息子といった死者のためにその者の姿をした偶像を作り、その偶像を死者の名で呼んだのである。そして、その後の世代の子孫たち¹²⁶ は、偶像は崇拜のため¹²⁷ 作られたと考え、また悪魔も彼らにそのように囁いたために、彼らはそれを崇拜したのであった。その後、神は彼らの宗教を分岐させた。彼らの中には、偶像を崇拜する者、太陽を崇拜する者、月を崇拜する者、鳥を崇拜する者、石を崇拜

¹²² マンチェスター写本では Jam Shādat (?) に、ケンブリッジ写本では Jam Shādan となっているが (M: 4a; C: 5a)、ここでは刊本に従った。ジャムシードは古代ペルシアの伝説上の王の名前で、ヤアクービーは4代目の王で、寿命は700年であったとしている (L: I, 178)。

¹²³ 具体的にどの地域を指しているのか明確ではないが、イスタフリー著『諸道と諸王国の書』の中に「ユーフラテス河の向こうの土地であるシリアの全て kull-mā warā' al-Furāt min al-Shām」という表現があり、これはバグダードの方面から見たユーフラテス河の向こう、すなわちシリア以西の領域を指していると考えられる (al-Iṣṭakhrī, *Kitāb Masālik al-Mamālik*, Leiden: E. J. Brill, 1927, p. 55)。ここでのヤアクービーの用法も同様にバグダードから見て西方を指しているであろう。

¹²⁴ マンチェスター写本では AZ'wā ʾازعو に、ケンブリッジ写本では AR'wā ʾارعو となっているが (M: 4a; C: 5a)、刊本では Irgū ʾرغو と直されている。ここでは刊本に従った。これ以降の名前についても同様。

¹²⁵ 刊本ではここだけ ARGhwā ʾارغو という形になっている。

¹²⁶ khalf. ケンブリッジ写本では khalq となっている (C: 5b) が刊本およびマンチェスター写本 (M: 4a) に従った。

¹²⁷ 両写本では hādhihi の後に illā があるが (M: 4a; C: 5b)、刊本では削除されている。ここでは刊本に従った。

する者、木を崇拜する者、水を崇拜する者、風を崇拜する者がいた。[19]その彼らを悪魔は誘惑し、道に迷わせ、暴虐にさせたのであった。セルグが130歳になった後、彼にはナホル Nāhūr¹²⁸が生まれていた。死がセルグを訪れると、彼は息子ナホルを後継者とし、神を崇拜するように命じた。セルグはアープ月27日日曜日に死んだ。彼の生涯は230年だった。

セルグの子ナホル

ナホルは父 [セルグ] の地位に就いた。その後、彼の時代には、偶像崇拜が盛んになった。それ故、神が大地に命じると、大地震が彼らを襲った。その結果、それらの偶像は地面に倒れたが、彼らはそれについては気にも留めず、偶像を元あった場所へと戻した。彼の時代には、魔術、託宣、鳥占いが行なわれるようになった。人は悪魔のために我が子を犠牲に捧げた。また、度量衡が定められた。ナホルの生涯は148年だった。その時代の巨人たちは、ノアの子セムの子アラムの子ウツ・Ūṣの子アード・Ād(の民)であった¹²⁹。既に彼らは諸国に散らばり、ハドラマウトの高地からナジュラーン Najrān¹³⁰の谷にかけての地域に住んでいた。彼らが墮落し暴虐の限りを尽くした時、神は、ノアの子セムの子アラムの子ウツの子アードの子ジャールド Jalūdの子フード Hūd¹³¹を遣わした。フードはアードの民に神を崇拜し、神に従い、禁じられた行為¹³²を行なわないように命じた。しかし¹³³、彼らはフードを嘘つきだと見なした。すると神は、3年間、彼らから雨を奪った。そこで彼らは、代表を聖なる神殿 al-bayt al-ḥarām へと派遣し、彼らのために雨乞いをさせた。彼らは40日間、朝、神殿の周りを廻り、サアイ儀礼を行い続けた yas‘awna¹³⁴。その後、彼らの前に二つの雲が現れた。

¹²⁸ ケンブリッジ写本では Yāhūr となっている (C: 5b)。

¹²⁹ アードの民は、クルアーンにも言及される、古代のアラビア半島にいたとされる人々。彼らは巨人であったとされる。アード族については、前嶋信次「古代アラビアの二民族：アードとサムード」『アラビア研究論叢：民族と文化』日本サウディアラビア協会、1976、1-26頁、および堀内勝「亡びたアラブ・アード族伝承 (1)」『中部大学国際関係学部紀要』31 (2003)、65-86頁、堀内勝「亡びたアラブ・アード族伝承 (2)：預言者フードの活動及びアード族の滅亡」『中部大学国際関係学部紀要』32 (2004)、1-30頁、堀内勝「亡びたアラブ・アード族伝承 (3)：長命者ルクマーンのこと」『中部大学国際関係学部紀要』34 (2005)、1-23頁を参照。

¹³⁰ 前イスラーム時代より栄えたアラビア半島南西部のオアシス都市で、同地域のキリスト教最大の拠点となった (薮勇造「ナジュラーン」『岩波イスラーム辞典』)。

¹³¹ 刊本ではジャールドではなくハルード Khalūd と読まれており、タバリー著『諸預言者と諸王の歴史』を典拠として、フードとハルードの間に、アブド・アッラー ‘Abd Allāh とリバーフ Ribāh の2人が補われている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, vol. 1, p. 231)。

フードの系譜については、①アード裔説、②アルバクシャド裔説、③ユダヤ人説、と大きく分けて3種類の伝承が広まっており、ヴァリエントも多い (堀内勝「亡びたアラブ・アード族伝承 (2)：預言者フードの活動及びアード族の滅亡」4-8頁)。どのヴァリエントが正しいのか断言することは難しく、ここでは両写本における表記に従った (M: 4b; C: 5b)。

¹³² マンチェスター写本では、MJāZM となっているが (M: 4b)、ここではケンブリッジ写本と刊本に従い mahārim と読んだ (C: 5b)。

¹³³ 刊本では、wa-kadhhabū-hu となっているが、両写本では fa-kadhhabū-hu となっており (M: 4b; C: 5b)、ここでは写本に従った。

¹³⁴ イスラーム教における大巡礼および小巡礼の行事の一つで、サファーの丘とマルワの丘の間を7回行き来す

一つは¹³⁵白い雲で、その中には雨と慈悲があった。もう一つは黒い雲で¹³⁶、その中には罰と試練があった。そして、彼らは「お前たちが望むいずれかの雲を選びなさい」と彼らに呼びかける声を聞いた。すると、彼らは「黒い雲を選びます」と答えた。すると、黒い雲が動き、彼らの頭上を覆ったのである。その雲が彼らの国に近付いてきた時、フードは彼らに対して言った。[20]「この雲の中にあるのは罰で、それは既にお前たちを覆ってしまったのだ」と。これに対して、彼らは「いいえ、それは《われらの雨を降らす雲である》」¹³⁷と答えたのだった。かくして、黒い風が吹き、全てを焼き尽くしてしまった。彼らの中で生き延びた者はフードを除いていなかった。また、アードの子ルクマーン Luqmān が生き延び、7匹分の鷲に相当する寿命を生きたという説もある¹³⁸。アード[の民]が滅びた後、その国々に住んだのはノアの子セムの子アラムの子サムード Thamūd の子ゲテル Jāzar の子サムード Thamūd の民であった¹³⁹。その支配者たちが居を構えたのはヒジュル Hijr¹⁴⁰である。彼らが暴虐の限りを尽くすようになると、神は彼らに対して、サムード¹⁴¹の子サードゥーク Šādūq¹⁴²の子ターリフ Tāliḥ の子サーリフ Šāliḥ を預言者として遣わした。彼らは、サーリフに奇跡をもたらすように求めた。すると神は、雌ラクダをその子ラクダとともに大地より創った。サーリフは彼らに「一日はこの雌ラクダが水に近付くための日で、もう一日はお前たちのための日である。故に、雌ラクダを水から遠ざけないように注意しなさい」と言った¹⁴³。しかし、彼らはサーリフを嘘つきだと見なした。彼らの中からクダール Qudār と呼ばれる男が出て、雌ラクダを傷付けた。彼は、剣でその脛を断ち切ったのであった。すると、子ラクダは大地の高い場所に登り、泣き叫んだ。その結果、神は彼らに対して罰を授けた¹⁴⁴。彼らの中で逃げ延びることができたのは、ザリー

る行のこと（森伸生「サアイ」『岩波イスラーム辞典』）。これに類することを指すものと考えられる。

¹³⁵ マンチェスター写本では *aḥad* となっているが (M: 4b)、ここではケンブリッジ写本と刊本に従い *iḥdā* と読んだ (C: 5b)。

¹³⁶ 刊本では、この後に *sawdā* という言葉があるが、両写本にはない (M: 4b; C: 5b)。ただし、この語句の補いは適切なものと判断し、刊本に従い訳出した。

¹³⁷ Q 46: 24。刊本では、この部分は『クルアーン』からの引用とはされていない。ちなみに、フードがアードの民に警告を行ったというこの物語とほぼ同様の物語が『クルアーン』の中に存在する (Q 46: 21–25)。

¹³⁸ 鷲の寿命は80年であるとも400年であるもの考えられていた（堀内勝「亡びたアラブ・アード族伝承 (3) : 長命者ルクマーンのこと」1–23頁）。

¹³⁹ 例えば、マスウーディー著『黄金の牧場』では、サムードは、アラムの子ゲテルの子とされるなど (*al-Mas'ūdī, Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 45)、アードと同様に、その系譜には複数のヴァリエントが存在した。

¹⁴⁰ アラビア半島北西部に位置し、「マダーイン・サーリフ *Madā'in Šāliḥ* (サーリフの町)」と呼ばれるようになった都市 (F. S. Vidal, "AL-ḤIDJR," *EI*²)。

¹⁴¹ 両写本では *Thamūd* となっているが (M: 4b; C: 5b)、刊本では *Hūd* と直されている。英訳も刊本に従っているが、『クルアーン』においてサーリフがサムードへの預言者として遣わされたされていることから、ここでは写本に従った。

¹⁴² 両写本では *Šārūq* となっているが (M: 4b; C: 5b)、ここでは刊本に従った。

¹⁴³ 完全な引用ではないが、『クルアーン』には「彼は言った。『これは一頭のラクダで、それには水飲みがあり、あなたがたにも周知の水飲みの日がある。それでそれに害を加えてはならない。さもなければ、大いなる日の懲罰があなたがたを捕らえるでしょう』」という文言がある (Q 26: 155–156)。

¹⁴⁴ サーリフに関する物語は『クルアーン』の中に複数回登場し、サムードの民が預言者であるサーリフの言葉

ア Dhari'a という 1 人の女性だけであった。件のクダールはアラブ人たちに諺として使われるようになった。

ナホルの子テラハ Tārakh

ナホルの子テラハは神の友アブラハム Ibrāhīm の父にあたり、巨人ニムロドの時代を生きた人物である。そのニムロドというのは、火を崇め、火を拝んだ最初の人物であった。その経緯は次の通りであった。大地から火が起こり、ニムロドはその火に近付き、それを拝んだ。その時に、その火の中から悪魔が彼に囁いたのであった。すると、ニムロドはその上に建物を築き、管理者を置いた。その時代に人々は天文学に従事するようになった。彼らは日食や月食、および惑星や恒星 al-sā'ira wa al-rātiba [の動き] を計算し、[21]天体や天宮について議論を重ねた。このことについてニムロドに教えたのは、ヨントン Yunṭuq¹⁴⁵ という名の男だった。テラハはアブラハムの父アーザル Āzar¹⁴⁶ にあたるが、彼は巨人ニムロドと共にいた¹⁴⁷。天文学者たちはニムロドのために計算し「貴方の国に生まれる赤子が貴方の宗教を汚し、貴方を貶め、貴方の偶像を破壊し、貴方の民を離散させるでしょう」と言った。するとニムロドは、彼の国に生まれる赤子は皆その腹を割くようにと定めた。その後、アブラハムが生まれたが、両親は彼を隠し、彼が生まれたことを秘匿した。そして、誰も彼について知ることができないような洞窟に彼を隠しておいたのであった。アブラハム誕生の地はクーサー・ラッバー Kūthā Rabbā¹⁴⁸ であった。アブラハムの誕生は、テラハが 170 歳になった後のことであった。アブラハムの父テラハは 205 年間生きた。

を警告を受け入れずにラクダの腱を切り、神によって滅ぼされたことが語られる (Q 7: 73–79; 11: 61–68; 26: 141–158; 54: 23–31; 91: 11–15)。例えば、91 章では「それでアッラーの使徒 (サーリフ) は彼らに言った。『アッラーのラクダとその飲み水を (警戒し、それに近づくな)』。ところが、彼らはそれを嘘として否定し、その (ラクダの) 腱を切った (殺した)。そこで彼らの主は彼らの罪ゆえに彼らを根絶し (懲罰で蓋い)、それを均し給うた」と、この部分に対応する物語が見られる (Q 91: 13–14)。

¹⁴⁵ 英訳に従い、ヨントンと解釈した。ヨントンは、ノアの 4 人目の息子の名前で、ニムロドとともに学んだとされる人物であるという (E: 278, n. 58)。

¹⁴⁶ 『クルアーン』にはイブラーヒームの父の名はアーザルだと記されている (Q 6: 74)。

¹⁴⁷ マスウーディー著『黄金の牧場』には、ニムロドはその中より自分を凌駕する王が現れることを恐れ、赤子を殺すように命じたが、彼は洞窟の中に隠れ、難を逃れた、とある (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 48)。

¹⁴⁸ 『旧約聖書』「創世記」に登場するクタに相当する町。バビロンの北東部に位置する廃墟の丘テル・イブラーヒームに相当すると考えられている (「クタ」旧約新約聖書大辞典編集委員会『旧約新約聖書大辞典』教文館、1989 年、p. 410)。